

---

# 恋姫無双 外伝 傾奇者

兎丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫無双 外伝 傾奇者

### 【NZコード】

N6589M

### 【作者名】

兎丸

### 【あらすじ】

戦国無双の前田慶次が恋姫の世界に入るというクロスオーバー作品です

傾奇者と呼ばれ、槍を使えば天下無双と言われた男が恋姫の世界に入り、旅し、少女達と出会いどのように生きていくかの物語です

## 第一話 傾奇者、参上（前書き）

この作品は作者が初めて書いた作品のため文がおかしかったり、誤字があつたりします

そして、この作品は作者の妄想で作られているので、それでも良い人は読んで下さい。

後、慶次の性格や話し方が違つたりするかもしません。出来るだけそうならない様に頑張ります

## 第一話 傾奇者、参上

周りに何も無い場所に金髪で派手な格好をした巨体の男と一頭の大馬がいた

慶次「：此處は何処かねえ」

男は思わず呟いた

男の名は前田慶次

一矛の朱色槍を自在に操り悪鬼の化身と呼ばれた愛馬松風と共に数々死線を越えてきた戦国最強の武士にして天下御免の傾奇者であった

彼は戦国が終わると同時に己の主である直江兼続がいる米沢で静かに余生を送っていた

だが気がつくと彼の愛馬、松風と共に見知らぬ地にいた。

慶次は、何故こんな場所に居るのか考えていた。  
確か自分は米沢にいたはずだ。

だが周りの景色はどれも当てはまらなかつた

慶次は何も思い浮かばないので頭を搔く

美しい金色の髪の毛が慶次が頭を搔くたびに揺れる

慶次は髪の毛は剃っていたはずだが戦国の時と同じ位に伸びている  
ということに気づいた

だが髪の毛が伸びている事に歯牙にも掛けず慶次は考え続ける

彼にとって髪の毛が伸びてこようが伸びて無からうがどうでも良かつた

それよりもこの地は何処と云ふことが重要だ

慶次「此処にずっといても仕方ないかね……いくぞ松風！！」

慶次は松風に跨りその場を去つた

慶次は松風に乗つて移動している最中、何処からか人の声が聞こえてきたので声が聞こえる方向に松風を走らせた。

すると一人の少女が黄色い布を頭に巻いたた男達に囲まれていた

慶次「あの嬢ちゃん、なかなかやるねえ」

慶次は思わず呟いた。

少女は男達に怯む事無く男達を倒していく。

慶次「だが、あの嬢ちゃん一人であの人数は無理だな」

少女に襲いかかる男達は五十人程度いる。

自分なら難なく倒せるが、あの少女一人では無理だろうと思ふ慶次  
は松風と共に男達に突進していった。

? 「流石にキツいか?」

少女は10人程度男達を倒すと、そう呟いた

男達の中から隊長らしき男が笑いながら少女に話しかけた

隊長「いぐりお前が強くてこの数は無理だろ。大人しく降参し  
な。」

? 「私は、お前程度の輩には負けぬ!」

少女は槍を構えて戦意を男達に見せる

隊長「なら、それが本当かどうか確かめてやろ。」

隊長ひしょ野は手下に合図を出し、男達は一斉に斬りかかってきた

? 「クッ！」

男達が少女に斬りかかるとした瞬間

慶次「オラアッ！！

巨大な黒馬に乗った男が、少女を斬りかかるとした男達に突進し吹き飛ばした

隊長「お、お前、何者だ！」

隊長らしき野は驚きながらも巨大な馬に乗った男に向かつて叫んだ。

慶次「俺は、前田慶次！！　お前さん達、いくら何でもこんな可愛らしい嬢ちゃん一人に対しても勢で襲いかかるとは卑怯じやないかい？」

慶次は男達に向かつてそう言つと、少女に話しかける。

慶次「嬢ちゃん、お前さんなかなか強いねえ。だが、お前さん一人での人数は無理じやないかい？」

少女は、突然の事で驚いていたようだがすぐに笑つた。

? 「ならば、貴方は私に加勢して下さるのか？」

慶次「ああ、嬢ちゃんに加勢してやるよ---。ところで嬢ちゃん、お前さんの名は？」

慶次と少女が話している最中に男達は斬りかかってくるが、慶次は槍で軽々と敵を倒していく

? 「我が名は趙子龍と申します」

趙子龍と名乗る少女も次々に敵を倒していく

彼女の槍は慶次とはまた違う強さがあった

慶次は、少女の名を聞くと一瞬虚をつかれた顔をするが、すぐに声を出して笑った

慶次「趙雲の嬢ちゃん、お前さんに色々と聞きたいことがあるんだが……とりあえず『ゴイツ等を倒すぞ!!』

趙雲「承知した!」

二人は男達に向かつて突進していった



## 第一話 傾奇者、参上（後書き）

ノリで書いたけど文が短い「え」にあまり進まない感じになりました。

徐々に良くしていって暖かく見守つて下せ。

## 第一話 雷電魔の呪（前編）

黙つてよひて話が進みません。

## 第一話 若き龍の名

賊との戦闘が終わった後、趙雲は自分と賊の戦闘にいきなり乱入し、自分に加勢した前田慶次と名乗る男に驚いていた。

あの後、慶次は一振りで十程の賊を真つ二つにしてみせた。

流石に味方の自分も  
その光景を見て啞然とした

見た目と同様に武に優れていると思ったが予想以上の強さだ

たった一振りで十程の男を倒せる男がいるなんて誰も想像出来ない  
だろう

だが目の前の男はそれをやってみせた

多分今倒れている賊達もあの時に自分と同じ事を思っていたらう

だから彼の武を見た賊達は戦意喪失していったのだ

その後は最初の威勢が嘘だつたかのように簡単に自分達に全滅させられた。

慶次（この趙雲と名乗る嬢ちゃんは嘘を言つてないだろ？ 眼で分かる。まさか、三國史の趙雲ではないだろ？ だが趙雲は確か男だ…）

もう少し情報が欲しいな）

趙雲「はい！ 我が姓は趙、名は雲、字は子龍と申します！」

趙雲がそつと慶次は渋い顔を見せた。

慶次「お前さんの腕前もなかなかだぜー」ところで、嬢ちゃんが名乗った名前は本名だよな？」

趙雲は目を輝かせながら慶次に言つ。

趙雲「凄い腕前ですね！」

慶次「趙雲」

趙雲「何ですか？」

慶次は趙雲にいくつか質問をし趙雲は淡々と質問に答えた

慶次「…………そんじゃ、この賊達は黄巾党の連中で間違いないんだ  
な？」

趙雲「はい、その通りです」

慶次（…まず分かった事は、此処は田の本でなく、三國史の時代の  
中国という事と今は黄巾賊との争いの前といつ事と何故かあの趙子  
龍が女という事か…）

慶次は、趙雲から聞いた情報をまとめ考えた。

どうやって、自分は此処に来たのか？

一瞬、先程考えていた事を頭に浮かんだが慶次は無駄だと思い考えを止めた。

慶次「ハツハツハ！！傾いてるねえ！」

慶次は急にテカイ声で笑いながらそう言った。

とりあえず自分は、あの三國史の時代にやつて來た。  
慶次はそれだけ分かれば良いと考えた。

三國史といえば、数多の英傑が出る時代だ。  
ならばその英傑達と刃を交えたり、共に酒を飲み交わしたいと考えた。

趙雲「慶次殿は、もしかすると天の御遣いではありますか？」

慶次「天の御遣い？何だいそれは？」

趙雲は慶次に天の御遣いについて説明し始めた

慶次「俺は、そんな大層な者じゃない。唯の戦人さ！」

趙雲「しかし、慶次殿の格好といい、先程の質問といい、それしか  
かんがえられぬが？」

慶次「俺は、お前さん達とは違つ世界から来たみたいだな。  
天の御遣いなんていうものではない。」  
だが、

趙雲「違つ世界とは？」

慶次「上手く言えないが、お前さん達の世界の物事と、俺の世界の  
物事が違うみたいだな」

慶次は趙雲が女という時点で、自分は単なる過去の世界ではない世

界に来たと理解していた

趙雲「そうなのですか。」

趙雲は、あまり理解できないという様子であった。

慶次「多分な。この話は」ここまでだ。しかし、これからどうするかねえ」

慶次（こんな面白い所に来たんだ。なら、楽しまなければ損だ。それに、趙雲以外の英傑にも合つてみたい。）

慶次「趙雲、お前さんはこれからどうするつもりだい？」

趙雲「私は自分の武を捧げるべき人物を探すための旅の最中です。」

慶次「俺が、お前さんについて行くのは問題ないかね？」

慶次は趙雲について行けば、他の英傑にも出でると思つた。

趙雲「むしろ大歓迎でござります。慶次殿の様な面白い方と一緒にいるとも退屈せずにすみそうだ。」

趙雲は微笑みながら言つた

慶次「嬉しいことを言つてくれるねえ。なら共に行こうか！」

慶次も微笑み、手を差し出して趙雲と握手した

趙雲「それにしても素晴らしい馬ですね」

松風の背中で、慶次に抱まつている趙雲が言った。

松風は慶次と趙雲の二人を乗せ、物凄い速さで走っていた。

慶次「コイツの名は松風。俺の自慢の相棒で、俺の国で最高の馬さ。」

「

慶次は、まるで自分が誉められたかの様に嬉しそうに話した。

趙雲「それに先程の戦いでは、慶次殿と一心同体の様に戦っていましたな。」

慶次「松風は、頭が良い。俺が動きたいように動いてくれる。だが  
コイツは俺と同じで自分が認めた奴以外は乗せんよ。」

慶次はそう言って松風の首を優しく叩いた。

松風は、ひひん、と嬉しそうに鳴いた

慶次と趙雲が楽しそうに会話していると慶次は松風を止めた

趙雲「如何なされた？」

慶次「…向こうに、さつきの賊達と同じ布を頭に巻いた連中がいる。

」

慶次は賊達がいる方向を指した

慶次「数は……………500程度か」

趙雲「もしかしたら、近くの村か街を襲いつつもりなのかもしれませんな。」

慶次「放つておくと後々面倒になるかもな。趙雲、俺は今から連中とやり合つがお前さんはどうする?」

趙雲「私も、共に戦いますぞ!」

趙雲は気合い十分という感じで答えた

慶次「なら決まりだな!」

慶次は松風を物凄い速さで賊達の方へ走らせた

慶次「待ちな!..」

慶次達は賊達の前に現れ、槍を構えた

賊「何だ、お前？ 殺されたいのか？」

慶次は一矢一矢しながら賊達に言つた。

慶次「残念だがねえ、お前わん達じゃあそれは無理だよ」

その言葉聞いて賊達は怒り顔を赤くした

賊「何だとー！ オイ、お前ひっつけやがー！」

一斉に慶次達に襲いかかる

慶次「フンッ！」

賊「うわあー！？」

襲いかかつた賊達のは慶次の槍の一振りで首を跳ね上げられた

賊「たつた一振りでこんな……。お前何者だ！？」

慶次「俺は天下無双の傾奇者、前田慶次！！命が惜しい奴は失せな  
！」

趙雲「天下無双とはまた大きくでましたな。」

趙雲は敵を倒しながら面白そうに言った。

賊「「ギヤアアアア」」

賊「「ギヤアアアア」」

賊「ば、化け物だ！」

慶次「お前さん達、最初の勢いはどうした？そんなんじゃあ俺にかすり傷すら付けられねえぜ！！」

慶次は賊達の数をものともせず賊達を倒し続ける。

賊隊長「お前ら、敵はたった2人だぞ！…さつさと倒せ！」

そう言った瞬間

慶次「はっはーッ！！」

慶次が賊を吹き飛ばし、賊の隊長の前に現れた

慶次「アンタが、コイツ等の頭だな？」

賊隊長「こ、この化け物があー！」

賊隊長は剣を振り下ろす、しかし

ガキンッと音が鳴り剣が折られる

慶次「その程度の腕じゃあ、俺は倒せんよ」

慶次は槍で剣を折った次の瞬間、賊隊長の首を跳ねた

隊長を失つた賊達は統率力を失い慶次達に倒され、慶次達の周りには誰一人立つていなかつた

趙雲「まさか、これほどまでとは……」

趙雲は慶次の強さに少し恐怖した

本当にこの男は人かと思わせるほどに

だがそれ以上に趙雲の心は慶次の強さに惹かれる

この男なら自分の全てを捧げても良いとさえ思つてしまつた

趙雲「慶次殿！…」

慶次「何だい？」

慶次は返り血を拭きながら返事した。

趙雲「私を、慶次殿に仕えさせ頑けませぬか?」

慶次「悪いが断らせてもらう!」

趙雲「な、何故ですか!?」

慶次「俺は、お前さんが仕えるべき人物では無い。」

慶次は趙雲の仕官を流す様に断るが…

趙雲「いえ、慶次殿は私が仕えるべき人物です。慶次殿が何と言おうがついて行きます!」

だが真剣な眼差しで趙雲は無理にでも慶次について行くと言った。

慶次「……面白な嬢ちやんだねえ」

慶次は苦笑しながら言った

慶次「分かった。別に付いてきても構わんよ」

趙雲「ありがと」やります、慶次殿！—いえ主！—」

趙雲は嬉しそうに言つた

慶次「その主と呼ぶのは止めてくれ、あまり好きじゃない。今まで通りに慶次で良いよ」

趙雲「では、慶次殿あなたに我が真名を授けます」

慶次「真名とは何だい？」

趙雲「真名とは、本人が許した人物のみ呼んで良い名です。」

慶次は、自分の世界との違いをさらに感じた

趙雲「我が真名は星と申します。以後そう呼んで下され」

星は微笑みながら言った。

慶次「星…か。良い名だ、これからようしな、星ー！」

星「はい、これからよろしくお願ひします。」

そして楽しそうに一人が話している時にどこかの軍が一人に近づいて来た

## 第一話 若き龍の呑（後書き）

やはり自分は文才が無いから迷つたり迷つたり進みません。後無理やり感もある。もしアドバイスがあれば「メンションして下さい」

## 第三話 英雄達との出合い（前書き）

お気に入り登録や「コメント」していただいた方々、ありがとうございます。これからも頑張ります！

## 第三話 英雄達との出会い

慶次達が賊を全滅させた後、公と書かれた軍旗を持った軍隊が現れ、中から一人の女性が慶次達に近づいてきた

女性は慶次達の周りを見て、尋ねた

? 「ここれは、お前達がやつたのか?」

慶次「ああ、俺達が倒した。それよりも、お前さんは、誰かね?」

? 「私はこの地の太守、公孫贊。お前達の名は?」

慶次「俺は、前田慶次。」

星「私は、慶次殿に仕える趙雲と申します。」

公孫贊「なら、慶次と趙雲。再び尋ねるが、本當にお前達一人だけで倒したのか？」

公孫贊は、信じられないという表情で再び尋ねた。

二人の周りには数え切れない程の賊の死体があつた。

かなり武を誇る者でもこんな芸等は易々とは出来ないと公孫贊は思つた

慶次「別に信じなくとも良いんだがねえ…」

賊といつても所詮は鳥合の集まりだった

幾多の戦場を越えてきた戦人である慶次にとって自慢する事の程では無い

星「私達が全滅させたのだ。そうですな、慶次殿」

慶次のかわりに趙雲が、胸を張つて答えた。

それを聞くと公孫贊は少し考える素振りを見せた

公孫贊（もし、この一人が言つているのが本當なら凄まじい力だ。  
それほどの力を野に放すのも勿体無いな。それに…この前田慶次  
という大男からは、すごい威圧感を感じる。もしこれほどの男が我  
が軍にいれば…）

公孫贊「それほどの力を野に放すのには勿体無いな。お前達、我が  
軍に来ないか」

慶次「悪いが、断らせてもらえるかい？」

公孫贊「…理由を聞いても良いか？」

慶次「俺は、自分が惚れた奴にしか仕える気はないんだ」

公孫贊「そ、それは、私に魅力を感じないと言つていいのか…」

公孫贊はショックを受けたようにして肩を下げる

慶次はその様子を見て大いに笑った

慶次「そういう意味じゃない。俺が仕えたいのは、面白な御仁だけ  
ということさ。だから氣を落としなさんな。お前さんは十分綺麗だ  
よ」

慶次がそう言つた途端に公孫贊の顔は赤くなつた

公孫贊はいきなり何て事を言い出すんだと言いたくなつたが、慶次  
の言つた事が嬉しかつたせいか余り声が出なかつた

星「なら私はどうですかな？」

公孫贊に対抗心を燃やしたのか、星は慶次に詰め寄る

慶次「お前さんもかなり綺麗だよ。俺が今まで出会ってきた女達の中でもかなり綺麗な方さ！」

真顔で答えられたので星も見る見ると顔を赤くしてしまった

慶次「とこりで公孫贊、お前さん達は何しに来たのかね？」

慶次が公孫贊に尋ねるが公孫贊の顔は未だに赤くなつたままだ

公孫贊「賊が動きだしたという情報があつたので来てみたが…遅かったようだな」

慶次達の周りを見て公孫贊は言った

慶次「ここ辺は賊の襲撃がよくあるのかい？」

公孫贊「ああ。最近、黄巾党とかゆう連中があちこち暴れ回っているんだよ」

公孫贊は困ったと言わんばかりに手を上げる

慶次「なら、賊を全滅させるまでは誰かこの辺でひまつぶつのはどうだい？」

公孫贊「… しょうがないな、それで手を打つか」

公孫贊は苦笑しながら了承した

そして慶次達は公孫贊の下に行くこと、となつた。

公孫贊の下に来て数日が過ぎた。  
その間、慶次は公孫贊から真名を授かつたり、この世界の人々の暮  
らしを見て楽しんだりし、賊を退治していた

白蓮（公孫贊）が真名を名乗った時、慶次にも真名聞こうとしたが、  
慶次は説明するのが面倒になり天の御遣いだからとか理由を曖昧に

して真名が無いと言つた

そしてある日、三人の少女が公孫贊の下に訪れてきた

白蓮「久しぶりだな、桃香」

? 「白蓮ちゃん、久しぶり！」

三人の内桃色の髪の少女が嬉しそうに白蓮に抱きついてきた

白蓮もまた嬉しそうにし少女を抱きしめる

白蓮「廬植先生のところを卒業して以来だな。元気そうで何よりだ。  
」

? A 「白蓮ちゃんも元気そうだね！ いつの間にか太守様になっちゃ  
つて、すごいよー」

白蓮「私はこの位置で止まってなんかいられないからな。通過点みたいなもんだ。それより桃香の方はどうしてたんだ?」

? A 「んとね、あちこちで人を助けてた。」

公孫贊「ほおほお、それで?」

? A 「それでつて? それだけだよ」

白蓮「はあ―――つ――?」

? A 「ひゃんつ! -?」

白蓮「桃香! あんた廬植先生から将来を期待されてたの? そんな事ばっかやつてたのか! -?」

? A 「う、うん。」

白蓮「どうして!? 桃香ぐらい能力あつたなら、都尉ぐらい余裕でなれたのに！」

慶次「一体どうしたんだい？」

二人が話している中慶次と星がやつて來た

白蓮の大声が聞こえてきたので慶次達は何事かと思っていた

慶次「白蓮、この嬢ちゃん達は？」

慶次が三人の少女に目をやり白蓮に尋ねる

三人共に驚いている様である

特に白蓮と話していた少女は思わず白蓮の背後に隠れる程であった

いきなり慶次の様な派手な格好をして獅子を連想させる髪型をした

大男が急に現れたら誰もが驚くだろ？

慶次は桃色の少女を見て苦笑しながら両手を上げた

慶次「驚かせてすまなかつた。俺は公孫贊の密将だ。公孫贊の大声が聞こえたもんで何事かと思って来たんだ」

少女達に敵意が無いことを説明すると白蓮が口を開いた

白蓮「すまない。ちょっと驚いた事があつたから思わず大声を出した。桃香、コイツが言つてる事は本当だよ。」

桃色の髪をした少女は恐る恐る慶次を見る  
それに対しても慶次は微笑みながら桃香を見る

? A (... ) の人の眼とつても優しい目をしてる。 )

桃色の髪をした少女は思わず見とれてしまった。

白蓮「紹介するよ、慶次。この子は私の友達だよ。」

? A 「は、初めまして！ 私は劉備 字は玄徳と申します」

桃色の髪をした少女は深々と頭を下げ名乗ってきた

慶次（ほお、この嬢ちゃんが劉備か…すると後ろの一人は…）

? B 「私は關羽 字は雲長と申します」

? C 「鈴々は 張飛 字は翼徳なのだ…」

続けて綺麗な髪をした少女と幼く元気な少女も名乗ってきた

慶次（この嬢ちゃん達が、軍神と呼ばれた関羽とその関羽と同等の力を持つ張飛か…。確かにこの嬢ちゃん達は見た目と違い相当な実力を持っているな…）

慶次は三人をまじまじと見て嬉しそうする

慶次「俺は前田慶次 よろしくな！」

星「私は、慶次殿に仕える趙雲 字は子龍と申す。」

慶次達も名乗り返した

そして慶次は手を差し出し 三人と握手した

白蓮「それで桃香？お前達は何しに来たんだ？」

? A 「確かに、白蓮ちゃん義勇軍、募集してるよね?だから手伝いに来たの」

白蓮「この二人の実力は?」

劉備「二人とも物凄く強いんだよ!」

劉備は子供の様に腕を広げて表現しながら言う

白蓮「桃香の言つことは少し信憑性が無いなあ」

白蓮は少し苦笑しつつそう言った

星「太守殿には人を見る目がないのでは?」

星は「ヤー、ヤとしながり言つ

白蓮「お前は、私の密将なんだから少しは口を慎めよ~」

白蓮は星を睨みながら言つが星はそれを軽く流す

慶次はそれを面白そうに見ていた。  
すると慶次はあることを思つてついた

慶次「白蓮、お前さんは嬢ちゃん達の実力を確かめたいのかい?」

白蓮「ああ、そうだが……」

白蓮がやつぱり言つと慶次は

慶次「なら嬢ちゃん達、いつか、俺と勝負しようや？俺もお前たちの実力みたいんだ！」

楽しそうにそんな事を言い出した

## 第三話 英雄達との出会い（後書き）

次の話の為に今回の内容が変になつたかも。○□△  
もし、おかしいところがあればコメントして下さい。

## 第四話 英傑達との戦い そして新たな友情

慶次が関羽達に勝負を挑み込んだ後、あの場にいた者達は表に出でいた

関羽（この男一体何者だ？）

関羽は慶次について考えていた

およそ七尺（一尺＝30cm）はある身長、  
そして重量な朱槍を軽々持つ剛力、慶次自身から放たれる圧力

関羽は慶次が並々ならぬ者と確信していた。

関羽「それでは、私から参ります！」

関羽は青龍偃月刀を構える

慶次（さて、三国志の軍神とやらの力を見せてもらおうかねー。）

慶次「さあ、かかるべきな……関羽……」

慶次がそう言つた瞬間、関羽は素早く移動し慶次に切りかかつてい  
た

関羽「ハアアアツ！」

だが

慶次「フンッ……」

「ガキーン」

関羽の攻撃は簡単に慶次に弾かれた

関羽「まだまだ！」

関羽は何度も慶次に切りかかるが全て慶次に防がれる

「ガツ！、ガキン！」

慶次「関羽の嬢ちゃん、お前さん強いねえ！」

「ガキーンっ！！」

関羽「ツ！！」

慶次は関羽の青龍偃月刀を強く弾いた

慶次「…でもな、俺はもつと強え…！」

慶次は槍を大きく振りかぶり関羽に打ち下ろした

関羽はそれを防ごうとし青龍を構えた

「グワキィイツ…！」

関羽「なにッ…！」

物凄い金属音が鳴り、関羽は青龍もろとも吹き飛ばされた

関羽（何という剛力！まさか武器）と私を吹き飛ばすなんて…）

関羽は慶次の強さに驚きながらも体勢を整える

星「…そろそろ、加勢が必要かな？」

張飛「鈴々も、いくのだ！」

星と張飛はそつまごしながら共に慶次に武器を構える

慶次「おつー、星、お前さんも混ざるのかい？」

慶次は嬉しそうに星に尋ねる

星「あなた方の戦い振りを見てたら、私も勝負したくなりました。

何か問題でも？」

星は「一ヤリとして言ひつ

慶次「むしろ、大歓迎だ！！三人共、まとめて掛かつてきな！！」

慶次は蜀の英傑三人と戦える事を嬉しく思つた

そして慶次 対 関羽、張飛、趙雲の三人との勝負が始まった

星「ハアアツ！、ヤツ！、ハツ！」

星は物凄い速さで慶次に攻撃を繰り出す

どれも必殺に値する程の威力があつた

慶次「おっ！なかなかやるねえ！」

「がキンッ！、ガツ！、ガキンンッ！」

だが慶次は星の攻撃さえ全て防ぐ

関羽「ハアアアツ！－！」

張飛「そりやああツ！－！」

続いて、張飛と関羽が慶次の背後から攻撃をしかけてきた

慶次「ムンッ！－！」

「グワキイイツ！－！」

慶次は星の槍を強く弾き

慶次「オラアアツー！」

「ドゴンツーーーー！」

そして物凄い勢いで踏み込み、槍の石突を地面に叩きつける

すると物凄い衝撃波が生じ、三人を襲う

星「なつー？」

関羽「クツー！」

張飛「うわあーーー！」

三人は衝撃波を受けて一斉に吹き飛ばされた

張飛「つ、強いのだ！」

張飛は素早く体勢を整える

慶次「休んでる暇は無いぜーーーー！」

しかしそくに慶次が張飛に追撃してくる

張飛「わあつーーーー！」

「ガキーンーーーー！」

張飛はそれを何とか防いだ

張飛「う、腕が痺れるのだ」

慶次はさらに攻撃を繰り出し

慶次「これで終わりだな！！」

張飛「うつー？」

〔ゾンブ……〕

そいつて張飛を吹き飛ばした。

張飛はそのまま壁に叩きつけられ氣絶した

星「貰つたー！」

慶次が槍を振り切った瞬間、星が突進し反対側から関羽も攻めてきた

しかし

「ガシツ！」

星「なつ！」

慶次は星の槍を片手で掘んで止めた

慶次「狙いは良かつた、たが相手が悪かつたな！－！」

慶次は星を槍」と持ち上げ

慶次「うおおおおおつ……」

そのまま関羽に向かつて叩きつけた

関羽・星「うわつ……」「

〔デジタル〕

関羽と星は頭がぶつかりその場に倒れた

慶次「まだやるか……？」

慶次はそれを見て、笑いながら言つが張飛は氣絶して、星と関羽はあまりの痛みで頭をおさえている

関羽・星「……降参です」

二人は余程痛かったのか少し涙目だった

慶次「…ありがとよ、久々に骨がある奴とやりあえて楽しかったぜ  
」

慶次は、微笑みながら二人の頭を優しく撫でた

星「け、慶次殿！」

関羽「あつ…。」

すると二人はみるみる顔が赤くなつていく

慶次「白蓮、嬢ちゃん達の実力が分かつたかい？」

慶次は一人を撫でながら白蓮に問う

白蓮「あ、ああ十分理解出来たよ。」

白蓮は驚きながら答えた

白蓮（ここまで強いなんて聞いてないぞ…。確かに関羽と張飛はとてもなく強かつたが、慶次は星を含めて三人を同時に相手にして勝つた。関羽達が全力で無かつた事も分かつたが慶次もまた全力を出している様ではなかつた）

白蓮は慶次の顔を見ながらそう思つた

関羽（まさか、慶次殿の実力がこれほどまでは…。）

関羽は慶次に頭を撫でられながら、慶次の強さに驚いていた

関羽（自分一人だけでなく自分と趙雲と鈴々の三人がかりでも手も足もでないなんて……）

劉備「愛紗ちゃん、大丈夫？」

関羽が考えていると劉備が関羽達に近づいてきた

関羽「あ、私は大丈夫です。桃香様」

劉備「本当に、大丈夫なの？」

劉備は心配そうに再び問う

关羽「はい、心配していただき有難う御座います。  
それよりも鈴々が…」

張飛「痛かったのだ！」

張飛は気がつき慶次達に近づいてきた

慶次「さつまはめんな嬢ちゃん。お前さん、大丈夫かい？」

張飛「大丈夫なのだ！ それにしてもお兄ちゃん、とっても強いのだ！」

張飛は大丈夫だと言わんばかりに元気よく慶次に答える

慶次「お嬢ちゃんもなかなか強かつたぜー！」

慶次は微笑んで言った

張飛は、いまだ慶次に頭を撫でられている幸せそうな星を見て羨ましそうにする

慶次は、その様子を見ると張飛の頭を撫で始めた

張飛「」やーーーーー

慶次は嬉しそうにする張飛を撫でながら思つた

慶次（さすがに英傑といつても、見た目道理の可愛らしい嬢ちゃん達だねえ…）

あのやり取りの後、慶次達は酒を飲み交わしていた

慶次「勝負事の後の酒はやっぱり格別だねえ！」

慶次は星オススメのメンマをシマリにして美味しそうに酒を飲む

星「あつー！慶次殿取り過ぎですぞーーー！」

慶次「悪い、悪い。あまりにも美味しさに手が勝手に……」

慶次はそつ言いながらもさりとメソマを取る

星「ああっー私の分まで食べるおつもりか！」

そんなやり取りを見て劉備達は笑っていた

劉備「慶次さんって、とっても面白い人だね。」

白蓮「ああ、アイツはとても愉快な奴さ。しかし、あれが天の御遣いなんて未だ信じられないよ。」

白蓮がそう言つと

劉備・関羽・張飛「「えー!?」」

三人はとても驚いた表情を見せる

白蓮「あれ? 言つてなかつたか? 慶次は天の御遣いらしいんだ」

それを聞くと関羽が星とじやれ合っている慶次に尋ねた

関羽「慶次殿は天の御遣いなのですか？」

慶次「俺にも良く分からんが、どうもそれがいいな。」

慶次は酒を飲みながら「でも良いという感じで答えた

すると関羽は劉備に耳打ちする

関羽「…桃香様、慶次殿に協力してもらつのはどうしよう？」

慶次「何だい？」

劉備「う、うん！あの、慶次さん！」

劉備達は何かを決めたらしく慶次に言い始めた

劉備「実は私達、」この国のみんなが幸せに暮らせる国を作りたいんです！あ、あの出来たら私達に協力してもらえませんか？」

慶次「…………悪いが断らせて貰つ。」

関羽「な、何故ですか！？」

劉備達は慶次の返答に口づ惑つ

慶次「お前さん達の誘いは嬉しいが今の俺は白蓮の密将でもある。それに、やりたい事もあるんだ。」

関羽「やりたい事とは？」

慶次「ただ、どうしてでも会ってみたい奴がいるんだ」

慶次は楽しそうに微笑む

劉備「……もうですか」

劉備達はとても悲しそうな顔をした

慶次「だが、もじめ前さん達に何か困った事があつたらこつでも駆けつけてやるよ。」

劉備・関羽・張飛「「えつ?」」「

慶次「こいつて共に酒を飲んでいる仲じゃないか! 俺達はもうダ

チ同士だ! 勿論白蓮と星もだ!

ならダチが困つたら助けるのは当たり前だろ?」

慶次は微笑んで答えた

劉備「あ、ありがとうございます！慶次さん…」

关羽「慶次殿、感謝します！」

張飛「慶次の兄ちゃんありがとうございます！」

关羽「慶次殿にも一つお願いがあります」

慶次「今度は何かね？」

关羽「私を真名で呼んで欲しいのです」

劉備「私もお願いします。」

張飛「鈴々もなのだ！」

慶次「良いのかい？」

関羽「私達を友と呼んだのはあなたでしょう。なら、その友に真名で呼んで欲しいのです。」

関羽は微笑みながら言つ

慶次「…これはまた面白い嬢ちゃん達だねえ。それじゃあ尋ねよう。お前さん達の真名は？」

劉備「私は、桃香です。」

関羽「私は愛紗です！」

張飛「鈴々は、鈴々 なのだ！」

慶次「桃香に、愛沙に、鈴々か…」

これから、よろしくな！ 桃香！ 愛沙！ 鈴々！」

桃香・愛沙・鈴々

「「「はい（なのだ）…」「

そうして一人の傾奇者は新たな世界で新たな友を手に入れた

## 第四話 英傑達との戦い そして新たな友情（後書き）

今回効果音つけてみました。  
もし変だつたり嫌だつたりすれば「メントよりじくお願ひします

## 第五話 霸王との出合(前書き)

Hン紹のHンの漢字も出ない。○□△

多少不愉快かもしませんが多めにみてください

## 第五話 羅王との出合

関羽達の勝負から数日が過ぎ後

エン紹、曹操、孫堅など、各諸侯達が集まり、黃巾党の討伐軍が結成され、黃巾党を一網打尽する事になった

勿論、白蓮の下に慶次達も討伐軍に参加する事になった

愛紗「立派な馬ですね」

慶次達が討伐軍の本陣に向かう中、愛紗は慶次が乗っている松風を見て言った

松風は愛紗に褒められたのが満更でもないといつ感じで、ひひん、と鳴いた

慶次「はっはっはーおい松風、お前さん愛紗に褒められたのが嬉しいのかい?」

松風は、そうだよ、と言つてゐる様に今度は低く鳴いた

慶次「なあ愛紗、お前さんも松風に乗つてみるかい。」

愛紗「え、良いのですか！？」

愛紗は目を輝かせながら松風の様な名馬に乗れる事が本当に嬉しい  
と思った

しかし何処からか物凄い殺氣を感じたので、 愛紗は殺氣を感じる  
方向を見る

星「……」

すると、星が愛紗を睨んでいた

星（そこは私の場所だ！）

星の田がそのように訴えていた

愛紗「うつー？」

思わず愛紗は後ずさつた

そして星と愛紗の間に危なげな雰囲気が漂う

星は苛立ちながら愛紗から慶次に視線を変える

星「慶次殿、私も松風に乗ってみたいのですが」

星の態度を見て慶次は一ヤリとする

慶次「星、お前さんひょっとして妬いたのかい？」

星「むつー?」

慶次「まあやう照れなさんな。いじは仲良くなつやー。」

慶次はやうて壁に手を差し出した

星「…はー」

星顔を赤くしながら手を受け取り、慶次の前に座る

慶次「愛紗、お前さんもだ」

やういながら愛紗にも手を差し出す

愛紗「し、しかし…」

愛紗は躊躇するが

慶次「松風なら大丈夫さ、お前さん達みたいな嬢ちゃんが一人乗つても問題無い」

慶次はそつと愛紗の手を無理やり取つて松風に乗せる

慶次「ちゃんと乗つたな？ それじゃあ、行くぜ松風！！」

松風「ヒビーンッー！」

松風は慶次に答えるように吠え物凄い速さで走り出した

白蓮「『アラ慶次！先に行くなよーー！』

桃香「愛紗ちやーん！待つてよーー！」

そして慶次達は討伐軍の本陣へと向かった

〔討伐軍本陣〕

慶次「……どうやら着いたみたいだな」

星「そのよつてドーリヤーこあすな」

慶次達は白蓮達より少し先に討伐軍本陣に着いた

慶次「愛紗、松風の乗り心地はどうだったかい？」

愛紗「はい、私達を乗せながら、風のよくなつた速さで走る松風に感動しました！」

慶次「そうかい！ ならもしまだ乗りたくなつたら俺に言いな。また乗せてやるよー！」

そう言って慶次は微笑んだ

? A 「あなた達は誰？」

慶次達の背後から金髪の少女が急に尋ねてきた

慶次「ん？ お前さんは？」

? A 「私の質問に答えなさい、あなた達は何者?」

金髪の少女は威厳を持つて再び尋ねる

慶次「…まず人に名前を尋ねる前に自分から名乗るべきじゃないかい?お嬢ちゃん?」

慶次はからかうような言い方で返答した

? B 「貴様、大人しく華琳様の質問に答えろ!—!—!」

金髪の少女の傍らにいた二人の内、黒髪の女性の方が怒りながら慶次に言つ

慶次「悪いが俺は相手が誰であろうと媚びる気はないんでな。だか

「いや、誰かの指図を受ける気も無い」

だが慶次はそれがどうしたと言わんばかりに答える

? B 「貴様アー！..！」

黒髪の女性は剣を抜いて慶次に切りかかろうとする

? A 「やめなさい春蘭」

? B 「ですが、この者は華琳様をーー！」

? A 「私はやめなさいって言つておるのよ。私の言ひことが聞けない？」

? B 「うー、分かりました……」

金髪の少女が言うと黒髪の女性は大人しくなった

? A 「確かにあなたの言う事も一理あるわね。私は曹操、字は孟徳。  
私の横にいる二人は夏侯惇と夏侯淵。あなた達は?」

慶次は少女の言葉を聞いて満足した

慶次「俺は趙雲 字は子龍 慶次殿に仕えている者だ。」

星「私は趙雲 字は子龍 慶次殿に仕えている者だ」

愛紗「私は、関羽 字は雲長と申します。劉備玄徳に仕えている者  
です」

曹操「公孫贊の所のね…。なら公孫贊は？」

白蓮「慶次へ先に行くなつて言つただろ~」

白蓮達がやつと慶次達に追いついて来た

慶次「丁度今来たみたいだぜ」

慶次は笑いながら言つ

曹操「そうみたいね。貴方にはまだ色々と聞きたい事があるけど、  
また後でね。行くわよ、春蘭、秋蘭」

曹操はそう言い残し去つていった

慶次（あのが霸王、曹孟徳か……）魔王と呼ばれた男、信長公に少し似ているな……

だが曹操は信長公とはまた違う力を持っているな……）

慶次は曹孟徳の後ろ姿を見ながらそう思つた

曹操「春蘭、秋蘭。」

夏侯惇・夏侯淵「「はつ」「」

曹操「貴方達、あの前田慶次と言つ男を庇ひつへ。」

夏侯淵「…ただ者ではありませんね。」

姉者があの男を切りかからうしましたが、あの男は微動だにしませんでした。並の者なら姉者の迫力だけで震え上がるのにです。」

曹操「あの男を倒せる?」

夏侯惇「正直に言つと、勝てる気がしません」

曹操「それは何故?」

夏侯淵「我々の武人としての本能がアレには勝てないと告げているのです。私達一人がかりでも勝てません。恐らく数を増やしても同じでしょう。」

曹操「貴方達にそこまで言わせるなんてね…。」

曹操（前田慶次…か。）

。。。

白蓮「コラ慶次！勝手な行動をするな…」

慶次「悪かった、悪かった。そのうちお前さんも松風に乗せてやる  
よ」

白蓮「…、誰もそんな事を言つてないだろー。」

現在、慶次は白蓮からの説教中である

桃香「愛紗ちゃん、さつきの女人は誰なの？」

愛紗「あの御方は曹操と名乗っていました。」

白蓮「曹操といえば、今回の討伐軍に参加している諸侯だ。慶次、お前何か失礼な事してないだろ？」

慶次「俺からは何にもしてないさ。」

星「いえ、慶次殿は曹操殿からの質問にちゃんと答べず、曹操殿の配下に反感をかっていました」

白蓮「…慶次」

慶次「ははははーあれは仕方がない事だ！」

白蓮「笑つて誤魔化すなー！」

白蓮は慶次の頭を叩こうとするが身長的に届かないでの手が空をきつている

慶次「だが、あの曹操の嬢ちゃんは全く怒つてなかつたから問題は無いだろ。それより速く行こうか！」

白蓮「あー逃げるなー」

慶次達は討伐軍の本陣の中に入つて行つた

## 第五話 翡翠との出会い（後書き）

慶次と恋姫の人達無理矢理からましてるから性格が違つ気がする…  
もし嫌だつたらコメントよろしくお願いします

## 第六話 黄巾党との戦（前書き）

総合評価が100ポイント超えました！！ お気に入り登録や評価していただいた方々ありがとうございます！ これからも頑張っていきます！

## 第六話 黄巾党との戦

慶次達が討伐軍の本陣に入った後、白蓮達は軍議に参加するために諸候達と合流していた

曹操「敵は私達、討伐軍より数が多いわ。でも所詮、数で物をいわせるだけの連中よ。真正面から当たつても特に問題は無いでしょう。後は誰が先陣を切るか決めましょうか？」

先程出会った曹操が各諸候に尋ねるが諸候達は積極的には名乗り出ない

曹操は思わず溜め息をついた

諸侯達は兵力を極力減らしたくないのだ

曹操はその事を理解していたがここまで消極的とは思つてなかつた

だがこのままでは埒が明かない

なら自分が先陣を切るしかないと曹操は思い、諸候達に伝えようと

したが

慶次「先陣は俺に任せてくれ！！」

慶次の戦場で鍛えられた声がその場に響いた

白蓮「慶次！勝手に決めるなよ」

白蓮はすぐに慶次を黙らせようとした

白蓮も他の諸侯と同じ考え方である

だから慶次が名乗り出る事は彼女にとって不都合であった

曹操「あなたは、さつきの……」

慶次「はっはっは！大丈夫を、白蓮。俺がいる限りお前さん達には指一本触れさせねえよ」

慶次は白蓮の頭を撫でた

白蓮「～～～／＼／」

白蓮は顔を赤くしながら慶次を睨む

慶次「それで曹操。俺達が先陣を切つて行つても問題無いかい？」

曹操はそのやり取りを見て再び溜め息をつく

曹操「ハア……。別に良いわ。その代わり無様に賊達に負けないようになさい。」

曹操（…まあ丁度良い機会ね。前田慶次、あなたの実力見せて貰う  
(わ)

「ひして慶次達は黄巾党に先陣を切る事になった

白蓮「民を苦しめる外道の賊共に、我らの力見せつけてやるが...」

白蓮は、兵士達の士気を上げる為に鼓舞する

兵士達は白蓮の鼓舞に呼応し雄叫びを上げる

兵士「「「おおおおつ...」」」

星「腕がなりますな」

星は冷静に見えるが闘争心が目に十分と宿っていた

慶次「おうよ！戦人としての血が騒ぐぜーーー！」

慶次もまた久々の戦に胸が躍っていた

公孫贊の軍は慶次・星が率いる隊、

白蓮が率いる本隊、

桃香・愛紗・鈴々が率いる隊となつてゐる

星「慶次殿の背中は私めにお任せ下され。」

慶次「気合い入ってるねえ。それじゃあ期待させてもりおつか。」

慶次は自分は大丈夫だからそんな事しなくても良いと思つたが星の

好意を無下にするのは悪いと思い素直に了承した

星「無論！我が武、常に慶次殿と共にあります！」

慶次の目をしっかりと見て返答する

慶次「なら、共に駆けよつか！！」

星「承知！」

その後二人は静かに出陣の時を待つた

白蓮は兵士達の前で剣を高々と上げた

白蓮「出陣だーー！」

大きな声で兵を号令し討伐軍本陣から公孫贊が出陣する

慶次「さあて、派手に傾ぶこつかーー！」

慶次達も白蓮の宣言に呼応し、指揮する事になつた兵達を率いて出陣した。

慶次の隊は慶次を先頭にして進軍する

慶次は松風の速度をさらに上げ

慶次「つおおおおおおつーーー。」

雄叫びをあげながら敵部隊に突撃する

敵兵は次々に慶次の槍の餌食となつたり松風に踏みつぶされていく

「グシャツ、スバーンーー！」

敵兵「「「死やあああつ」「」」

敵兵「な、何だありやーー？味方がどうぞ倒されていいーー！」

敵兵はその光景をみて狼狽える

? 「狼狽えるな！！ 僕様があの野郎を討ち取つてやる…」

敵の将らしき男が兵に活を入れて、馬を走らせ慶次に突進する

? 「うおおおつ！」

慶次「おつ？」

「ガキイイン…！」

突然きた攻撃を慶次は容易く防いだ

? 「はつ！ よく防いだな！！

俺の名は菅玄、お前の首をたたき斬る者だ！」

敵兵「菅玄様……あんな化け物、もつと殺してやつてください…。」

菅玄「おうよーー！」

巨大な斧を持った男菅玄はさらなる攻撃をくり出していく

「ガキン！、ガツ、キイン、ガガツ、ガキン！」

慶次はそれを全て防ぐ

菅玄「ハツ！少しばらみみたいじゃねえか！！だが防いでいるだけ  
じゃあ俺様には勝てねえぜ…。」

菅玄はそう言って斧を振り回していく

「グワキィイーンッ！…」

菅玄「クツ！」

だが慶次は菅玄の斧を強く弾き、手を前に出しクイ、クイと指を曲げ挑発する

菅玄「テメエ、俺を舐めてんのか！？」

菅玄は慶次の態度に腹を立てる

慶次「いいから早くかかってきな！」

慶次はニヤリとしながら言つ

菅玄「馬鹿め！－俺を怒らせた事をあの世で後悔しな－！」

菅玄は全力で慶次に斧を振り下ろしてきました

「…ショソシ－」

菅玄「えつ？」

「－ヂサヂ－」

慶次に斧は振り下ろされず、斧は菅玄の腕と共に地面上に落ちた

菅玄「あああああつ－…－俺の腕があああつ－…－」

菅玄はあまりの痛みで叫びだした

慶次「どうやら馬鹿だったのはお前さんだったみたいだねえ！」

菅玄「ひ、ひいいーば、ばけ「シユンシーー！」

慶次はそのまま菅玄の首をはね上げる

慶次「敵将、前田慶次が討ち取った！！！」

敵兵「そんな、あの菅玄様が簡単にやられちまつなんて……」

敵兵「あ、あんな化け物に敵う訳ねえよー。」

敵兵はあまりの出来事に再び狼狽える

星「我々も慶次殿に続くぞ！！」

慶次が菅玄を倒した事により味方の士気が上がる

敵兵「コイツ等止まらんこぞ！！」

敵兵「やめやめつづけ」

次々と敵兵は倒れていき、中には逃げ出す兵もいた

兵士「伝令」

## 曹操「何？」

兵士「公孫贊の密将、前田慶次が敵軍の將、菅玄を倒し敵の軍を圧倒的に倒していきます。」

曹操「よく働いてくれてるみたいね…。春蘭、秋蘭、あなた達が言うだけはあるわ。でも私達も負けていられないわよ！」

夏侯惇 夏侯淵「はっ！」

夏侯惇と夏侯淵はそりそり戦合意を入れ敵を倒していく

曹操（前田慶次…最初合つた時ただ者ではないとは思つたけど…どうやら、かなり使える男みたいね。公孫贊の所から私の所に来ないかしら？ この戦が終わつたら勧誘してみましょうか）

曹操はそのように考へながらその場を後にした

そして慶次の武功は他の諸侯達の耳にも入り、討伐軍は勢いに乗つて黄巾党を押していった

慶次「いや、俺達はこのまま先に行く。」

慶次は一旦後ろを見、自分達の後方にある白蓮達の隊を確認した

星「大体片付いてきましたな。これから他の隊が来るまで待機なされますか？」

慶次達は菅玄を倒した事により勢いに乗り菅玄が率いていた部隊を壊滅させていた

星「ならば、早く行をあわせ」

慶次「おうつー！全員、俺について来い！！」

卷之三

慶次のかけ声で兵士達の士気は最高の状態となり、慶次達はさらに軍を進める

星（…………敵を圧倒的に倒していく武を持ちながら、人の心をひきつける器も持つておられる。先程、背中を守るなどと言つたが、あの背中、遠いな）

星は慶次の背中を見て、そう思いながら後を追つていった

慶次「つおおおおつーーー！」

「グシャツ！、スバア！、グシャ！」

敵兵「わやああつーー。」

敵兵「うわあっ」「

慶次は鬼神の如きの強さで敵を倒していき、敵本隊にまで突撃して  
いた

慶次「大体倒したが…敵の首領さんの姿が見えないねえ。  
お前さん知らないか?」

慶次は倒れている敵兵に尋ねる

敵兵「は…ははっ! 張角様達は俺達が逃が…した。もう…ビ…  
こか…と…お…く…に…逃げ…」

敵兵はそう言つて動かなくなつた

慶次「…」

星「どうされるので?」

慶次「敵の首領さんが逃亡したな!」この戦はもう終わりだ。  
時期に、他の諸侯達が敵の残党を倒すだろ!」

慶次はそう言い槍の血を拭き取り始めた

星「敵首領を捜なくともよろしいので？」

慶次「敵の首領さんは会つてみたかったが、捜してまで会つ必要はないな。」

星「ですが賊達の首領を見つけなければ終わりではないのでは？それに、この争いを起こした者ですから見つけないと再び大変な事になるかも知れませぬぞ」

慶次「そうかもしけないねえ」

星「なりー。」

慶次「だが敵さんも命を賭けてまで守った首領さんだ。そこまで馬鹿な奴でもないだろ。それに…」

星「それに？」

慶次「この戦はもう勝ちも当然だ。俺は勝ち戦には興味がないんだ」

星「…勝ち戦に興味がない？」

慶次「勝ちが決まってる戦なんてつまらないからだ。戦は勝ち負けがあるからこそ面白いんだぜ。…それに手柄を上げる為に犬のように戦を追いかけるなんてみつともないと思わないかい？」

星は思わず黙ってしまつ

戦に出る者は星や桃香達の様に忠や義の為に戦つもの、あるいは欲の為に戦つものだけだと思つていた

だが男はどちらにも当てはまらない

ただ強敵と戦う事だけ望んで戦をしている

戦う事に善と悪がないように、誰もこの男を善とも悪とも呼べない  
だろつ

星は変な男に仕えたなと声に出して笑ってしまった

慶次「何か面白いかったかい？」

慶次は突然笑い出した星を不思議に思った

星「ええ、慶次殿の馬鹿さが可笑しくて笑ってしまいました。」

慶次「それは呆れたという事かい？」

星「むしろ逆ですね！やはり私の目に狂いがなかつた。慶次殿みたいな愉快な方に仕えて良かつたと思つています」

慶次「ふつ……ふあーっはははー…やつぱり面白な嬢ちゃんだ」

星が笑うのに釣られるように慶次も豪快に笑い出した

慶次にとつて、主従の関係であるにもかかわらずいきなり自分を馬鹿と呼び、そんな自分に仕えるのが良いと言い出した星が可笑しかったのだ

慶次「それじゃ、そろそろ白蓮達と合流するかね」

慶次は松風に乗り星に手を差し出した

星「はい！」

そして二人は互いに笑いながら松風に乗つて白蓮達の下へ駆けた



## 第七話 出発（前書き）

長く放置しててスマセン。

## 第七話 出発

黄巾党の本隊が壊滅したという報が流れると報を聞いた賊達は戦意を失い、逃走し始めたり、討伐軍に降伏し始めた。

黄巾の乱は討伐軍の勝利という結果になりつつあった

そんな中、慶次達は白蓮と桃香達と合流していた

鈴々「慶次お兄ちゃん！」

慶次「おつとー。」

鈴々が帰ってきた慶次に飛び込んで抱きつく

鈴々「慶次お兄ちゃんはやっぱり強いのだ！」

慶次「あれぐらい戦人にとってあ朝飯前だぜ、鈴々。」

白蓮「何が朝飯前だ！

いくうなんでも無茶しそぎだろー。」

慶次の発言を聞いた白蓮が慶次に怒鳴る

慶次が率いていた隊はおよそ千  
対して敵はおよそ三万以上の大軍であった

普通は味方と連携して倒していくべきだが、慶次は味方が来るのを

待たずしに白蓮先頭に出て鬼神の如き強さで敵陣を切り開いて行つた

白蓮「いくらお前が強くても、あれは無謀だ！」

続けて白蓮は慶次に説教する

慶次「だつて約束しただろ？」

慶次が微笑みながら言つと白蓮は戦闘前に慶次が自分と約束していた事を思い出した

絶対に自分達を守ると

だから慶次は危険を承知で敵軍にあたつた

白蓮「だ、だがそれでも

」

慶次「…ひょっとして白蓮、お前さん俺を心配してくれたのかい？」

慶次はニヤニヤとしながら白蓮を見る

白蓮「ひ、人が説教してるときこぶさけるなー。」

白蓮は顔を真っ赤にしながら囁つ

慶次「ははははー！　お前さんも照れ屋さんだねえ。」

慶次は白蓮の赤くなつた顔を見て可笑くなり笑い出した

白蓮「誰も照れてなんかいなーいー！」

慶次「はいはい。分かつた分かつた」

白蓮「分かつてないだろ！」

白蓮は慶次にツッコむ

慶次「それはさておき、敵の首領の事なんだが……」

慶次はそれを無視して話を変え始めた

白蓮「…………さておくなよ。まあいい、それでどうした？」

慶次「悪いが、逃げられたみたいだ。敵さんによると、俺と星が敵さんとやり合ってゐる間に逃げたらしい。」

白蓮「…そつか。だが今逃げられたとしても、いづれ他の諸侯に

捕らえられるだらうな。」

愛紗「確かにそうでしょうね。それに黄巾党は今回の戦で戦力が大分削がれました。もう戦う力も無いでしょう。」

慶次「今回の戦はこれで終いかね。」

白蓮「そうだろうな。一応お前の活躍のおかげで、他の諸侯も勢いにのつて敵を倒していくみたいだしな」

慶次「なら俺の役目もここまでだな」

白蓮「もう行くのか?」

慶次「ああ。黄巾党の連中を退治するまで届く約束だったからな。

俺の力はもう必要ないだろ「つせ」

白蓮はそれを聞くと慶次には密将では無く正式に自分の将になって、自分を支えてくれないかと言おうとしたが、言えなかつた

そんな事をしたら慶次をただ困らせるのが明らかだった

白蓮（「コイツには、会いたい人がいるんだよな。私が子供みたいに我が儘を言つて困らせる訳にはいかないんだよな）

白蓮「… そつか。お前の様な愉快な奴が居なくなると少し寂しくなるな」

白蓮はつらい気持ちを抑えようとするが、それが中々出来ないようであった

慶次「そんな顔しなさんなつて。 縁があればまた会えるさ。」

慶次はそんな白蓮の様子を見て苦笑する

慶次「それに俺とお前さんは友だ。  
さんに会いに来るよ。」

今度は一人の友としてお前

そう言って白蓮の前に拳を出した

白蓮「… 本當だな？」

慶次「嘘を言つてぢづするんだい？」

白蓮「そうか。なら私は次にお前と会える日を一人の友人として楽  
しみにして待ってるからな。」

白蓮は微笑みながら慶次の拳に己の拳を合わせた

桃香「慶次さん。」

白蓮と拳を合わせ後桃香が慶次の名を呼んだ

桃香「短い間だつたけど、私慶次さんと一緒にいた時間は楽しかつたです。だから、その、私達の所にもお友達として会いに来てく  
れませんか？」

桃香は図々しいのではないかと思いながら恥ずかしそうに言った

慶次「別に頼まれなくても、会いに来るつもりだ。だって俺らは友  
だらう？」

慶次は何をそんなに緊張しながら言いつのかと思いつつも微笑みなが  
ら桃香に言った

桃香「ありがとうございます！慶次さん！私達も慶次さんに会えるのを楽しみに  
します」

慶次が自分達にも会いに来るよつに答えると桃香は嬉しそうに笑顔になつた

愛紗「慶次殿、私は貴方と出会えた事が本当に嬉しい」とでした。貴方のおかげで己がまだ未熟者であると理解でき、貴方という友が出来た。これからは友である貴方を目標にして己の武を高めていきます。」

鈴々「鈴々も、次はお兄ちゃんに負けなこよつに頑張るのだ。」

慶次「はつはつはー、なら俺も次に合つ時を楽しみにしておくかねえ。」

そう言つて慶次は笑い、桃香と愛紗と鈴々の頭を軽く撫でた

慶次「とにかくで、星？」

星「何でしょうか？」

慶次「本当にこのまま俺について来るつもりか？」のまま桃香達と一緒に居ても良いんだぜ？」

自分の知っている歴史通り、なら星は桃香の下に仕え、後に五虎大将と呼ばれる者達の一人となり、後世まで語られる程の武功を残すなら自分がのような人物に仕えるより桃香に仕えさせた方が星のためになると慶次は考えた

星「何を馬鹿なことを…。」

だが星は呆れたようにした

慶次「お前さんが俺を見込んで付いてくれるのは嬉しい。だが俺には名も、地位も、財も、なければ何かする大望もない。そんな奴について来てもお前さんの得にはならないさ。それどころかお前さんには辛い思いをさせるかもしれない。それより、愛紗と鈴々と共に桃香の天下取りを手伝つた方がお前さんの為になる」

星「確かに、劉備殿と共に國の為に天を指すのも悪くありません  
な」

慶次「そうかい。それじゃ - - - 」

星「ですが…私といつ龍は貴方といつ雲と共にいた方が好ましいの  
ですよ。慶次殿」

慶次「なにつ！？」

慶次は予想外の答えを聞いて愕然とした

何故、星は自分の様な何も無い者に仕えようとするのかと思つたが  
すぐに理解できた

彼女もまた傾奇者であるのだと

自分は直江兼続という男に仕えた

それは決して兼続が

上杉の家老といつことが理由では無い

ただ直江兼続といい男の人柄に純粹に惚れ込んだだけである

だから自分は傾奇者として惚れ込んだ男に命を張った

そして兼続は自分の願いに答えた

星もまた、自分の何かに惚れ込み、仕えようとしているだけであった

なら自分も彼女の想いに答えなければ

慶次はそう思い、口を開いた

慶次「分かった。もう俺からは何も言わないさ。何処までも俺を追つて来な。」

星「以前も申したように、そういうつもりですよ。」

そつ言つて星は笑顔を見せた

慶次「…と言つたわけでも白蓮、別れる前に一つ頼みがあるんだが…」

白蓮「何だ？」

慶次「馬を一頭貰えないかい？出来たら良い馬が良い。」

白馬「馬？ 何故だ？」

慶次「今の話の通り星は俺について来る事になつた。2人で松風に乗つて移動は出来るが、戦の時も2人で乗るわけには行かない。かといってそちらの馬じゃあ松風には追いつけない。だから頼む。」

そつとつて慶次は手を合わせる

それを見て白蓮は少し考えこむ

白蓮「…良いだろ？ お前等は今回の戦でかなりの武功をたてたんだ。なのに褒美が無いなんてのはあんまりだからな。」

慶次「ありがとう、白蓮。」

星「伯珪殿、感謝します」

慶次が白蓮に礼を言つと星も頭を下げ礼を言つ

白蓮「それで趙雲にやる馬だが、私の愛馬の一つの一頭、白龍でどうだ？」

慶次「それは有り難いが、良いのかい？」

白蓮「お前達の働きはそれ以上だったからな、これぐらい安いもん

やつまつて白蓮は兵に指示し白龍を連れて来せらる

白龍は松風とは較べよしも無かつたが、ぬ馬と呼ばれてもおかしく無い馬であると一目見て分かつた

星が自分の下に来た白龍の顔に触れると 白龍は微かに首を動かした。

星は白龍と何かが通じ合つたと思つた

白蓮「どうだ、良い馬だろ？」

星「はー。こんな馬を本当にいいんで？」

白蓮「ああ。

その代わり大事にしりよ。」

星「言われなくともそういうつもりですよ。」

星は再び白龍の顔に触ると今度は早く白龍に乗つてみたいと思つた

星「慶次殿早く行きましょ。」

慶次「そんなに急がなくとも白龍は逃げなこさ。」

今の星の様子は玩具を与えられた子供のようであつた。  
その様子を見て慶次も嬉しくなつた

慶次「白蓮、想像以上の褒美に感謝するよ。」

慶次は再び白蓮に礼を言つ

白蓮「だから気にするなつて。趙雲も想像以上に喜んでいるみたいだしな。白龍も趙雲の様な者が乗れば喜ぶだらう。」

白蓮は星と白龍を見ながら言つた

慶次「それじゃ、今度こそ俺達は行くよ。」

そう言つて慶次が松風に乗ると、星も白龍に乗つた

慶次「また会おう」

そつ言い残して2人はその場を去つていった

愛沙「それは仕方が無い」とです。慶次殿には慶次殿の目的があるようですし、

桃香「慶次さん達行つちゃつたね。」

去つていく慶次達の背を見ながら桃香は言つ

桃香「慶次さん達行つちゃつたね。」

愛沙は桃香にそう言つが桃香の気持ちが分からなくもなかつた。

慶次は自分と鈴々と趙雲の三人を相手に圧倒的な実力差を見せつけた

それに今回の戦で最も武功を立てたのは間違いなく慶次だった

あの力さえあれば桃香の大望に大きく近づく事が出来る

桃香も恐らく自分と同じ事を思つてゐるのだろうと愛沙は思つた

桃香「でも、慶次さんの目的って確か誰かと会つ」なんだよね？」

愛沙「慶次殿はそう申していましたね。」

桃香「だつたらその会いたい人に会つた後なら私達の仲間になつてくれるんじやないかな？」

桃香は良いことと思いついたと言わんばかりに両手を合わせる

愛沙「それはどうでしょ?...」

愛沙は苦笑しながら応えた

桃香「だつて慶次さん私達のことをお友達つて言つてくれたんだよ。  
きっと仲間になつてくれるよ」

桃香は自信ありげに言つがその保証は無い

確かに彼は自分達の事を友と呼んでくれた

きっと自分達が助けを求めたら力になつてくれるはずだ

だが力を求める者達があれ程の武を放つておく訳がない

今回の戦で天の御使いである彼の武勇は各諸侯にも伝わった筈だ

ならば自分の配下にしようとする者が必ず現れる

愛沙がそのように考へていると

夏侯惇「此處にまえだけいじはいるか！？！」

今自分が考へていた人物の名を大声で呼ぶ者が現れた

その瞬間、桃香は驚きすぐに愛沙の背後へ隠れた

夏侯淵「姉者、そんなに大声を出すな。」

大声を出した女性の後ろから別の女性が現れた

夏侯惇「す、すまん秋蘭」

夏侯淵「私に謝つてどうする…。 すまない公孫賛殿、我が姉が失礼をした。」

白蓮「別にかまわないがお前達は何者だ?」

夏侯淵「申し遅れた。我らは曹操様の配下である者です。私は夏侯淵。こちらが我が姉の夏侯惇。」

白蓮「曹操の所の者が私に何か用か?」

夏侯淵「我々が用があるのは公孫賛殿ではない

白蓮「じゃあ何しに来た?」

夏侯淵「公孫賛殿の客将である前田慶次といつ男に用があるのです。

「

桃香・愛沙・鈴々・白蓮「！？」

つい先程まで自分達といった男の名を上げられ桃香達は再び驚いた

白蓮「曹操が一体慶次に何の用がある？」

夏侯淵「我が主は戦前にもあの者と会っていたのですが、再び会いたいと申されたので連れて行きたいのです」

白蓮「……残念だがそれは出来ない。」

夏侯惇「何故だ？……。もしやあの男を隠しているのだな！」

夏侯惇が白蓮に突っかかる

夏侯淵「……姉者、少し黙ってくれ。話が進まなくなる」

しかしそくに夏侯淵に止められた

夏侯惇「うう、秋蘭～」

夏侯淵「理由を聞いてもよろしいか？」

落ち込む姉を無視して夏侯淵は尋ねる

白蓮「あの男は私の所を出て行ったよ

夏侯淵「それは何時？」

白蓮「ほんの少し前だ。その入れ違いでお前達が来たって事を」

夏侯淵「今から追えば間に合いますか？」

白蓮「あの一人が乗っているのは並の馬ではないから、多分無理だよ」

夏侯淵「二人？」

白蓮「もう一人の名は趙雲。あの男の従者さ」

白蓮がそう告げると夏侯淵はため息をついた

夏侯惇「秋蘭、これでは無駄足ではないか？」

夏侯惇「仕方が無い事だ。華琳様には悪いが今回は諦めてもう一つ尋ねても？」

白蓮「何だ？」

夏侯淵「あの男は何者ですか？」

白蓮「……天の御使いらしい」

夏侯淵「…それはあの男が申したので？」

夏侯淵は田を細めながら尋ねる

白蓮「ああ」

夏侯淵「…質問に答えて頂き感謝します。 それでは失礼します。  
行くぞ姉者。」

夏侯惇「おうー。」

二人は一礼をして去つていった

鈴々「あいつ等、慶次お兄ちゃん何のようだったのだ?」

白蓮「多分曹操も私達のように慶次を仕えさせようとしたんだがさう

鈴々「そつなのか?」

白蓮「じゃないと、わざわざ此処に来る理由が無い」

愛沙「ですが」こんなに早く来るのは思いませんでした。」

白蓮「それは私も驚いた。多分曹操は慶次に会つた時にあいつの何かを感じ取つたんだ。だからまた会いたいと言つ出したと私は思う」

愛沙「…………これからの方はどうして行くのでしょうか？」

愛沙は慶次達が行つた方向を見る  
彼らの姿はすでに見えなくなつていた

星は白龍の走りに感動していた

そこの馬よりかなり速く走つており、あの松風についていける

松風に乗っている慶次を見て自分も良い馬に乗りたいと思っていた  
が慶次のおかげで手に入れる事が出来た  
むしろ白蓮には勿体ない無いぐらいだと失礼な事を考える

慶次「おい、星！」

星「…？ 何ですかな？」

慶次「…ずっと呼んでいたんだがねえ」

星「…申し訳ない」

「どうやら白龍の事に夢中になりすぎて慶次の声に気付かなかつたようだ

慶次「はつはつはー謝らなくとも良いさー戦人にとって良い馬に乗れる事程嬉しいことは無いからな。」

慶次は豪快に笑う

慶次「俺も初めて松風に乗った時もそんな感じだつたさ。」

星「慶次殿も？」

慶次「ああ」

確かに松風程の馬に乗る事は誰もが羨む。慶次も自分のようにはしゃいでいたのか、星はそう思った

星「松風との出会いは？」

慶次「それはまた今度話してやるね」

慶次は今教える気は無かった

慶次「それより俺の目的は分かるよな」

星「会いたいお方がおられるのでしうつ。」

慶次「そうだ。だがその御仁に会つ前にしつと寄り道をしたくなつた。」

星「寄り道？ 何処に行かれるので？」

星は首を傾けて尋ねる

慶次「曹操の所だ」

星「曹操殿の所ですか……」

星は頭を細めた

慶次「嫌かい？」

星「私は慶次殿が行く所には何処でも付いて来ます。ただ、伯珪殿と別れた時にそのまま向かえばよろしかったのでは？」

慶次「はっはっは！そんな事したら、あの御仁には俺を仕えさせようとするに決まっているわ。」

慶次はまた笑つた

自分が知っている限り曹操は武や知に優れた人物を敵であつても仕えさせようとする人物だ

今回の戦で目立つた自分も仕えさせる可能性があつたのだ

もしその誘いを断つたら相手にしてくれなくなる

だから慶次はすぐに会いに行かなかつたのである

星「なら何故、曹操殿に会いに行くので？」

星が慶次に尋ねる

慶次「魔王と魔王は何が違うか知りたくなったのか」

そう言って慶次は自分の世界の魔王との世界で出会った魔王の姿を思い出していた

第八話 陳留侵入 前編（前書き）

ギリギリ一週間で書けました

誤字が多いと思います

## 第八話 陳留侵入 前編

現在、慶次と星は曹操が統治している陳留に訪れていた

とりあえず陳留に着いた一人は空腹だったので料理屋で食事をしていた

慶次「美味しい」

出された料理を口に入れた慶次は素直に料理の味を讃めた

星「確かに、ここのは料理は絶品ですね」

星もまた料理の味を褒めた

もちろん星の隣にはメンマの壺があり、料理とメンマの味の両方を楽しんでるようだった

慶次「本当に美味しいねえ。白蓮の所でも色々食べていたが、此処の料理はこっちで食べた中でも最も美味しい」

そう言つて慶次は料理に箸を進めてすぐに完食した

慶次「嬢ちゃん、料理を追加しても良いかい?」

? 「はーい。」

慶次が呼ぶと小さい給仕の女の子が出てきた

慶次は女の子に追加の料理を注文し、女の子は注文された料理を確認し厨房へ戻り、しばらくして追加の料理を持ってきてくれた

慶次「それにしても、まだ若いのに大した腕前だねえ」

慶次は箸を進めながら給仕の女の子に話しかける

給仕「い、いえ。そこまで言われる程では無いです。」

女の子は嬉しかったのか、照ながら答えた

星「謙遜する事は無い。お主の腕前は何処の城の料理人と言つても可笑しくは無いからな」

慶次「そうだぜ。こんなに美味しい料理を作れるんだ。お前さんを抱えたい奴は数え切れない程出でてくるさ」

給仕「ありがとうございます。でも私はそつするつもりは無いんです」

慶次「何故だい？　城の料理人にもなれば良い暮らしも出来ると思うんだが……」

給仕「一応この街の城主である曹操様からも直々のお誘いがあつたんですけど、断らせて貰いました。」

慶次「曹操から？」

給仕「はい！」

こんな所で曹操の名が出てきた事に慶次は少し驚いた

星「断られた曹操殿はどうしたのだ？」

給仕「断つた理由を話したら分かつてもらえたみたいで、それ以来  
は勧誘される事はなくなりました。でもよくここでお食事を済ます  
ようになりました。」

星「その理由を尋ねても良いか？」

星は曹操直々の誘いを断つた理由が知りたくなった

慶次の言つ通り城の料理人になれば良い暮らしも出来るのに

給仕「大した事じやないんです。私の親友に呼ばれてこの街に来たんですけど結局合流する事が出来なかつたで、親友の手掛けかりが見つかるまでここで働いているつもりなんです。でもこの街が思ったより広くて……」

給仕の女子は困ったように言つた

慶次「それは難儀な事だねえ。良かつたらその親友とやらの特徴を教えて貰えるかい？」

給仕「え、何故ですか？」

慶次「この街にいる間にお前さんの親友と出会つたら、お前さんがここで働いている事を教えてやうつと思つてな。」

給仕「でも悪いですよ……」

慶次「遠慮しなさんなって。」の街を回るついでさ。」

そう言って慶次は微笑んだ

給仕「…本当に良いんですか？」

慶次「良いに決まってるさ。 そういえば自己紹介がまだだつたな  
？俺は前田慶次。んでこつちは趙雲。お前さんの名は？」

給仕「私の名前は典イです。」

慶次「ほひ…」

慶次は典イの名を聞くと口を細めた

典イと言えば曹操の配下で物凄い怪力を持つた男だが慶次の目の前にいるのはそんな事とは無関係そうな女の子である

人を見かけで判断するのは良くないがこんな女の子がどうやって戦うのかと思つてしまつ

だが鈴々も小さな体だつたが、かなり重い蛇矛を扱つていたのでこの娘も同じなんだろうと考えを変えた

典イ「あの…」

慶次「ああ、悪い悪い。それで教えてくれるかい？」

典イ「はい。」

星「お主の親友も料理人なのか？」

典イ「いえ、食べる方は大好きなんですけど料理はさっぱりなんで

す。ただ私を呼んでくれたって言つことは、料理屋で働いているんじゃないかな…と

慶次「手紙か何かで仕事は聞いてなかつたのか?」

典イ「住み込みの良い仕事が見つかつたから、来いとだけしか…。  
ただ、私が呼ばれるくらいですから、彼女も食堂の給仕か、力仕  
事の裏方をしているのかと。力には自信のある子なので。」

慶次（そんな内容で呼ぶ方も呼ぶ方だが、来る方も来る方だねえ）

星「食べる事が大好きで、力に自信がある娘か…一人そのような  
人物を知っているが別人だな。その娘の名は？」

典イ「ええつと、真名じやない名前なら、許緒です。」

慶次「…………」

典イ「どうしました？」

慶次「いや、何でもない。」

慶次（典イときて次は許緒か…）

慶次はやはり自分の知っている三國志と違つと思つた

今まで慶次が出会つた者達は殆ど女性である。

一応男の将もいたが有名な将は今の所女性のみである。

ただ男女を入れ替わつただけと思っていたが、この世界ではそれだけでは無く色々と異なつている

例えば星などじぢばりへ白蓮の下にいるはずだが、今は自分の従者である

そしてこの典イとその親友の許緒も自分の知っている史実では本来曹操に仕えていたのだから料理屋で働いているとは絶対思わなかった

なんて傾いた世界だと慶次は思った

すると一つ気になつた事があつた

慶次「なあ、典イ」

典イ「何でしようか?」

慶次「許緒はお前さんに城で働いているとか書いてなかつたかい?」

典イ「確かに城に来いつて書いてありました、あの子の『冗談ですよ。多分どこかの大きな建物をお城正在しているんでしようけど

…。何故知つてゐるんです?」

慶次「なに、ちょっとな…」

慶次はその「冗談が「冗談じゃないかもしけない事を言おうとしたが確証が無いので言わないことにした

慶次「それだけ分かれば十分さ。それじゃ俺達は行くぜ。」

慶次は話しを終わらせ席を立ち会計を済ませた

典イ「有り難う御座いました! それじゃお願ひしますね

慶次「おひー それじゃまたな」

そうつ言つて慶次は手を振り、星と共に店を出て行つた

慶次は街の様子を見ながら呟いた

慶次「ああは言つたがどうするかねえ。」

陳留は曹操が統治しているお陰かそれなりに栄えている

星「慶次殿は曹操殿に会いに行かれなくても良いので?」

星は慶次の隣を歩き  
ながら尋ねた  
元々この街に来た理由は曹操に会つことだったのだ

慶次「会いに行くさ。 ただねえ…」

星「先ほどの娘の事ですか?」

それは曹操殿に会つてからでも問題はないでしょう?」

慶次「その事は問題ないよ。 多分曹操の所に行けば解決するはずさ」

星「それは何故？」

慶次「恐らく、典イの親友…許緒は曹操に仕えていると思つ」

星「ほう…それには根拠があるのでですか？」

慶次「天の御使い特有の根拠があるのでさ。」

慶次は笑つて言つた

星「なら何を迷つてるので？」

慶次「どうやって曹操に会いに行くかを考えているのか。」

星「城に行くだけではないですか。何を考える必要があるのです

か？」

星は慶次が考える理由が全く分からなかつた

慶次「ただ普通に会いに行くのは面白く無いだらうへ。」

慶次は真面目な顔をして答えた

星は慶次が答えるとますます分からなくなつた

普通に会いに行くのが面白く無いとかの問題なのかと思つた

星「慶次殿」「うわあ……！」

慶次・星「…？」

星が慶次の名を呼ぼうとした時、突然叫び声が上がった

星「慶次殿！」

慶次「おうー」

二人は叫び声が聞こえた方に向かう

星「あれは…」

するとそこには黄色布を頭に巻いた20人程の男達が民を襲つてい  
た

悪党「良いから金出せって言つてんだろ？がーー！」

民「ひいこつー。」

悪党は民の胸倉を掴んで大声を出してい

星「あれは黄巾の賊の残党か。」

黄巾党の頭目であった者が曹操に討たれたと言つ情報があつた  
だが頭目が死んでも下つ端の連中があのように暴れるのか  
星はそう思った

星「慶次殿行きますぞーー。」

星は後ろに立てる慶次に言った

星「慶次殿？」

だが彼女の後ろには主である慶次の姿が無かつた

星（何処に行つてしまわれたのだ）

「先輩のお手伝い…」

星「!?.しまつた!」

星は叫び声が聞こえたので民が傷つけられてしまつたと思つた

慶次「その喧嘩、俺が買つた……！」

慶次が黄巾党の残党を殴り飛ばしていた

悪党「な、何なんだテメエ！？殺されてえのか！？」

悪党達が慶次を取り囲む

慶次「はつはつは！ 威勢が良いねえ！」

悪党「何が面白いんだよ！ 頭可笑しいのか！」

そう言って悪党の一人が慶次に襲いかかる

「ドンッ！――！」

悪党「ゴフッ！」

襲ってきた悪党は慶次の上段蹴りをまともに食らって吹っ飛ばされた

悪党「あ、あいつ強えぞ。」

悪党「何言つてやがる！数はこっちが上なんだから一気にいくぞ！」

男達は慶次に一斉に襲いかかつた。

慶次「喧嘩は都の華だ！ 派手にいこうぜ！」

それを慶次は楽しそうにして、悪党達に向かって行つた

〔ドガツ・ゴンツ・ゲシツ・メキヤアーーーー〕

慶次は悪党達を次々に殴り、蹴り、投げ、潰し、あつと言つ間に悪党達を一人残らず倒した

いくら数が多くても花の都である京でいつも喧嘩していた慶次にとって屁でもなかつた

そのあまりの出来事にその場は静まり返った

「 「 「 「 ひおおおお …… 」 」

だがすぐに見物人達から大きな歓声が上がった

民「やるな、兄ちゃん! すかつとしたぜ!」

民「格好良かつたよ! ……」

慶次に次々と賞賛と拍手が送られる

慶次はそれに手をひらひらと振つて応える

民「田那、有り難う御座います」

先ほど悪党に胸倉を掴まれていた民が慶次に礼を言つ

慶次「なに、俺は弱い者虜めが嫌いなだけさ」

慶次は笑いながら言つ

慶次「ん?」

慶次は自分の前に来た星に気づいた

星「慶次殿は自分勝手にし過ぎですな。」

星は不機嫌そうな顔で慶次を見た

慶次「何を怒っているんだい？」

星「分かりませぬか？」

慶次「分からぬえ」

慶次は星が怒る理由が本当に分からなかつた

星が自分を心配して怒るというのが想像出来ない、というか多分心配すらしてないだろう

では他に何があるかと考えるが思い付かない

星「慶次殿ばかり良い所を取つて居る事に納得いかないのでよ。」

慶次「さつきの喧嘩の事かい？ ならお前さんも混ざれば良かつた  
じゃないか」

星「あの空氣で私がでられるわけないでしょ！」

慶次「ならどうすれば良かつたんだい？」

理不尽に怒られる慶次は困ったような顔をする

星「私の出番を残して頂きたかった！」

慶次「…お前さんそれだけで怒つたのかい？」

星「当然でしょー！」

慶次は予想外の答えに啞然とした

慶次「…それなら今度からはお前さんが俺より先に手を出すよつこ  
しな」

苦笑しつつも星の頭を撫でながら言った

慶次と星がそんなやり取りをしていると 閩體の鎧を着た男達が来た

兵「遅くなつた! 怪我をしている者はいるか?」

閩體の鎧を着た男達は警備兵らしく民の安全を確認していた

警備兵「これは… 一体…」

警備兵達は黄巾党の残党が既に倒れていた事に驚いた

警備兵「何が起きたのだ?」

警備兵が民に尋ねる

民「へい、そこにいる田那が我々を助けてくれたのです。」

警備兵は民が指している慶次に目を向けた

警備兵「…お前がやつたのか?」

慶次「そうだが、何か問題あるかい?」

警備兵「…民を救つて貰ったのは感謝する。だが曹操様が統治している街で暴れた事には変わりない。一緒に来て貰おうか」

慶次「はっはっは!まさか俺を牢屋に入れる気かい?」

慶次は豪快に笑つた

警備兵「良いから来い。 その者は残れ。 他の者は悪党達を連れていけ」

警備兵の隊長らしい男は兵一人残して他は悪党達を牢屋に連れて行つた

隊長「よし、 来い」

警備兵の隊長は慶次を連れて行こうとする

星「待て! 我が主に手荒な真似は止めて頂こう」

隊長「お前はこの野の関係者か？ ならばお前も来い」

星「嫌だと言つたら？」

星は不敵に笑う

隊長「力ずくでも連れて行くぞ」

星「出来るものならやつてみせよー。」

星は構えをとるが、

慶次「やめな、星ー。」

だが慶次は星を止めた

星「ですが……」

慶次「良いから」

慶次が短く言つと星は渋々構えを解いた

慶次「そんじや、連れて行つてくれ」

慶次がそつ言つと兵を先頭にして慶次達を連れて行つた

.....

しばらく慶次達が大人しく歩いていると突然慶次が止まりだした

隊長「どうした？」

慶次「…悪いが廁に行きたくなつた」

隊長「…何?」

警備兵「嘘をつくなー。どうせ逃げようとしてるだけだろ」

先頭にいる警備兵が慶次に怒鳴った

慶次「嘘じゃなことなんなら此処でやつても構わないぜ」

そつと慶次は下に手をやる

隊長「ま、待て。分かつたから止める」

慶次が本当にするかもしないと思い隊長は慌てて慶次を止める

隊長「おい、お前」

警備兵「はつー！」

隊長「俺はこの男について行く。お前はそこで待機しておけ」

警備兵「了解です」

隊長「行くぞ！」

隊長は慶次を連れて街の細い道へ連れて行つた

それからしばらく経つたが一人は帰つて来なかつた

星（慶次殿は何を考えているのだ…）

星は先ほどの慶次の行動が理解出来なかつた

警備兵達を倒そうと思えば出来るのに何故慶次は大人しく警備兵に従つのか

星はずつとその事を考えていた

警備兵「おい」

星「なんだ?」

警備兵「お前はそこにいる。俺は隊長の所に行く。…もし逃げたらお前の主の命は無いと思え」

そつ言い残して慶次達が向かつた街の細い道に行つた

星（誰が慶次殿を置いて逃げるものか）

そしてまたしばらく待つていると慶次一人が何かを持って戻ってきた

た

星「慶次殿！」

慶次「待たせたねえ、星

慶次は笑いながら星に近づく

星「あの二人は？」

慶次「ぐつすり眠つてもらつたよ」

星「それは何なんですか？」

星は慶次が持つて いる物に指を指した

慶次「見ての通り鎧だが？」

慶次はニヤニヤしながら星を見る

星「…まさかこれの為にわざわざ捕まつたのですか？」

慶次「その通りだが？」

星「…やはり慶次殿が考えておられることは私では想像がつきませ  
んな。」

星は呆れながら言つ

慶次「ははははーそれはお互い様さ。それよりこれを着な」

そつ言つて慶次は星に鎧を渡した

星「これを見ると、まづは、まさか…」

慶次「そのまさかや。これから俺達は曹操の兵に変装して曹操の城に行くぜ」

慶次は子供がイタズラを思い付いたような顔で星に言つた

星（全く、この方ときたら…）

星はそんな慶次の予想外な行動と今の慶次の顔を見て呆れつつもやはつこの男は面白いと思つた

## 第八話 陳留侵入 前編（後書き）

やつぱり自分には一週間で書くのはキツいかな

一週間で一話位のペースでもキツいかも

まあ出来るだけ頑張ります

## 第九話 陳留侵入 中編（前書き）

戦国無双3がプレステ3で出るみたいですね。  
個人的にWi-Fiは微妙だったんで結構期待しています。

でも村雨城はどうなるんでしょうね…

## 第九話 陳留侵入 中編

先程警備兵達から奪つた鎧は慶次にとつては多少小さかつたが身に着けられない程では無かつた

星は奪つた鎧が汗臭いなどと文句を言つて身に着けるのを躊躇つていたが、慶次が身に着けないと置いていくと言つたら渋々と鎧を身に着けた

一人で陳留の城に入る時は、兵士達が城に入る様子を見てからそれと同じようにし難無く城に侵入する事が出来た

そして今二人は城内を歩き回つている

慶次「意外と堂々としつければバレないもんだねえ。」

慶次は城内のあちこちを見ながら星に話しかける

星「慶次殿の場合は肝が据わりすぎなのですよ。」

星は緊張感を全く持たない己の主人を面白そうに見て笑う

慶次「そつかい？ そつかいお前さんもかなり肝が据わっていると思つが？」

星「ふふつ、確かにその通りかもしませんな。」

星もまた緊張感を全く持たず、むしろこの状況を楽しんでいる様であつた

星「まあさびつなものだ。」

慶次「とつあえず許緒を捜し出して典一の事を教えてやらな」とな。

「

星「ならば一 手に分かれましょ。 そうした方が効率も良いかと」

慶次「… そうだねえ。 ここはお前さんの言ひ方と一緒にしてみるか。」

星「なら私はあちらの方へ行きます。 それではまた後ほど。」

そつ言つて星は慶次と違つ方向へ歩いて行つた

慶次「さて… どこから捜し始めるとするかね。」

そつ言つて慶次はしばらく歩いた

すると扉が少し開いている部屋を見つけた

慶次は周りに人がいないのを確認し、その部屋の中を覗き込んだ

慶次「!?」

部屋を覗き込んだ慶次は驚いた

部屋の中には思い掛けない人物がいた

慶次「曹操……」

玉座にいると思っていた曹操が何故此処に居るんだと慶次は思った

慶次（此処は曹操の部屋なのか…。だがそれにしては部屋が散らか  
つていてるねえ）

部屋の中は慶次が見たことの無いひらひらとした可愛らしい服が沢  
山散らかっていて、曹操が黙つたまま椅子に座っていた

ここに慶次は考え始めた

曹操がこの部屋に居るのは予想外であったが部屋に居るのは彼女だ  
け

彼女と一人きりで話すにはもつてこいの状況である

この機会を今逃したら次があるかは分からぬ

ならば」は中に入るべきだ

ついでに許緒と典イの事も曹操に言えれば解決するだろう

なら迷う必要は無い

慶次はそう考え部屋に入る

慶次「曹操様、失礼します。」

今の慶次は曹操の兵士に変装しているので礼儀正しく部屋に入った

曹操「……」

慶次「曹操様？」

曹操「……」

慶次「？」

慶次がいくら曹操の名前を呼んでも曹操は黙つたままであった

まさか変装がバレたかと思ったがその割には反応が全く無い

今の彼女はまるで人形の様に椅子に座つたままである

いくら名前呼んでも反応が無いので今度は肌に触れてみた

慶次「……まさか？」

慶次が曹操の肌に触れても反応は無かつた

それも当然である

曹操が人形の様に座つているのではなく、曹操の人形が椅子に座つていただけなのだから

慶次「まさか…これが人形？」

慶次が驚くのも無理が無かつた

この曹操人形は誰がどう見ても曹操本人にしか見えない

よく忍などが影武者としてその者の主そつくりに変装していたのを見たことがあつたが、ここまで精巧に作られた人形を見るのは初めてであつた

慶次「それにしても良く出来ているねえ」

慶次は曹操人形を観察しながらこの人形を作った職人がこれを作のにどれほど魂を込めたのかと思つていた

慶次「これほどの出来ならこの人形は影武者の役割を十分果たせるな。

だが、何でこの部屋は服で散らかっているんだ？」

慶次がそんな事を言つていると部屋の外から足音が聞こえてきた

足音は徐々に大きくなつてくる

恐らくこの部屋に誰か来るんだろうと思つた慶次は急いで寝台の下に隠れた

慶次（…ちと狭いな）

「バタンッ！－！」

扉が豪快に開けられた

寝台の下に隠れている慶次は誰が来たのか確認するために寝台の下から覗き込んだ

そこには多くの荷物を抱えた長髪の女性と少し短髪の女性がいた

慶次（あの一人何処かで見たような…………。そうだ、

確かあいつ等は夏侯惇と夏侯淵だ）

慶次は以前曹操と会つた時曹操の両脇にいた二人を思い出した

夏侯淵「……姉者、鍵を閉め忘れるなど不用心にも程があるが。」

夏侯淵が呆れた顔をした

夏侯惇「うつ。だ、だが華琳様人形には何事も無いようだし良しこりではないか。」

夏侯淵「……これは、我々だけの秘密だ。例え我が軍の兵士だとしてもこの事を知られたら私達はその者の口を封じなければならない  
……永遠に。」

夏侯淵は夏侯惇に詰め寄りながら注意する

夏侯惇「わ、分かった秋蘭。次からは気を付ける。だからそんな怖い声でそんな事言つな。」

夏侯惇は夏侯淵の凄みのある声に冷や汗を浮かべる

慶次 おつかないねえ

その二人の話を聞いて、慶次はもし見つかったら兵士に変装しても夏侯姉妹が自分を殺そうとするだろうと思つた

夏侯淵「では、始めるしよう。」

そつ言つて夏侯淵は夏侯惇と共に曹操人形の服を脱がし始め、別な服に着替えさせる

服を脱がした時に見えた所も人間の肌にしか見えなかつた

夏侯惇「おおつーやはりこの服は華琳様にお似合いだ！」

夏侯淵「うむ……」

別な服に着替えさせられた曹操人形は確かに似合つていた

夏侯姉妹は曹操人形を十分に見た後、別な服を探す

夏侯淵「次はコレなんかどうだ？」

夏侯惇「それも中々だな。では早速、華琳様に着て頂こう」

夏侯姉妹は先程と同じように曹操人形の服を脱がし夏侯淵が選んだ  
服を着せる

どうやら曹操人形は影武者の役割だけでなく曹操の服を見立てる役  
割ための役割を果たしているようだった

慶次（なるほど……部屋が服だらけだったのはそういう事かい。  
自分達の主の為にここまですることは、曹操も良い家臣を持っている  
ねえ。）

慶次は曹操に対する一人の忠誠心に感心した

慶次だが

夏侯惇「はあ、華琳様は何を着られても美しい！」

夏侯惇は頬を染めながら曹操人形を見る

夏侯淵「そうだな。だが華琳様にもっと魅力的になつてもらう為には我々がより良い服を見つけなければならぬぞ。」

夏侯惇「分かつてゐる！」

二人は再び服を探し始める

慶次（…だが何時になつたらコレは終わるんだ？）

寝台の下にいる慶次は一人の様子を見ながらそんな事を思った

部屋の中には大量の服がある

恐らく二人はこれらをすべて曹操人形に試着させるのだろう

それが終わるまでこの状態でいるのは肉体的にも精神的にもキツいと慶次は思った

しかしここで出でてしまったら夏侯姉妹との戦闘は避けられず、曹操に会うどころか許緒を見つけ出す事すら出来ない

何か良い方法はないかと慶次は考える

そんな時、扉の向こうから女の子の声が聞こえてきた

? 「春蘭さま、 いますか?」

夏侯姉妹 「! ?」

夏侯姉妹は扉の向こうから聞こえた声に驚く

夏侯惇「あの声は季衣かー?」

夏侯淵「…姉者」

夏侯淵は呆れながら夏侯惇を見る

? 「えりですみー。」

夏侯惇「な、何用だ?」

? 「今田街からお菓子を沢山買って来たんですよ。秋蘭さまも誘つて一緒に食べましょー。」

夏侯惇「い、今は忙しいのだ。後で一緒に食べよう。」

? 「そんなん。ボク我慢出来ませんよ。」

夏侯淵「季衣、先に食べていっても良いぞ。後で私達も頂く。」

? 「あ、秋蘭さまもいらっしゃったんですね? でもボクは春蘭さま達と一緒に食べたいんです。」

夏侯惇「だがな、季衣」

? 「今一人で何してるんですか?」

その質問を投げられた時夏侯惇は固まってしまった

夏侯惇「秋蘭……どうしよう?」

夏侯淵「私としては姉者には居留守をして欲しかったんだが……。」

夏侯惇「あつ……」

夏侯淵「…こうなつては仕様がない。季衣に華琳様人形を見せる訳にはいかないからな。華琳様の服はまた後日にしよう。」

夏侯淵は溜め息をついて言つた

夏侯惇「うう、分かつた」

夏侯淵「先に季衣と行つといてくれ。私も部屋を片付けてから向かうとする。」

? 「春蘭さま？ 秋蘭さま？」

夏侯淵「ほひ、姉者。」

夏侯惇「ああ。それじゃあ、また後でな。季衣、行くぞー。」

夏侯惇は外から部屋の中が見えないようすぐに部屋を出た

? 「春蘭さま、秋蘭さまはどうしたんですか?」

夏侯惇「秋蘭は部屋を片付けてからすぐに来るそうだ。だから一人で先に行こう!」

? 「はーい!」

元気の良い返事が聞こえた後二人の足音はだんだん小さくなつていった

残された夏侯淵は部屋を片づけ始めた

そんな夏侯淵を見て良い妹だなつと慶次は思った

夏侯淵「…………ふう、こんなものかな。」

しばらく経つた後部屋は綺麗になっていた

夏侯淵「それでは私も行くとするか」

そう言い残して夏侯淵は部屋を出た

「ガチャン」

慶次「…………ふう。」

慶次は夏侯淵が出て行つた後思わず溜め息をついた  
ただでさえキツい鎧を身に着けているのに、狭い寝台の下に隠れて  
いたので疲れてしまった様である

慶次「意外な事になつたが見知らぬ女の子のお陰で何とかなつた。」。

それについても中々面白い物を見せてもらつたな。」

慶次は先程の事を思い出してククッと笑う

慶次「とは言え此處に長居は無用だな。次はどこを探すとするかね  
え」

慶次はのんびりとしながら部屋を出て行つた  
この事が後で大変な事になることを知らずに…

慶次が夏侯姉妹の部屋に隠れている最中星は城の広場に居た

? 「ハーツ！、ハア、ハツ、ハツ！」

星「…………ふむ。」

星は一人の女の子の鍛練を観察していた  
動きに多少無駄があるが鍛えれば相当な実力を持つだろ？と星は思  
つた

? 「どうした？私に何か用か？」

訓練をしていた女の子は星に気づき話しかけてきた

その時女の子を良く見たら顔や体のあちこちに傷があつた

星「いや、お主が鍛練に良く励んでいるので感心していた。」

? 「私は夏侯惇将軍達に比べたらまだまだだからな。いつやつて少しでも強くなれるように鍛練に励まなければならない。そういえば見慣れない顔だな。新人か?」

星「…それみたいな者だな。私の名は趙雲 字は子龍、お主は?」

? 「私の名は樂進、字は文謙。私も最近曹操様に仕える事になったんだ。」

星「ならば樂進殿、一つ尋ねても良いか?」

樂進「私に答えられる事なら何でも。」

星「大した事では無い。この軍に許緒という人物はいるか?」

樂進「…お前は本当に入ってきたばかりなんだな。許緒様は我が軍の親衛隊を率いているんだぞ」

樂進は呆れたように星に言った

それを聞いて星は慶次が言つていた事は正しかったんだと思った

この時まで星は、慶次が天の御使いの根拠があるといつ理由で許緒が曹操の下にいると言つていたので半信半疑であった

星「それで許緒殿は何処に？」

樂進「少し前に街に出掛けられたのを見たぞ。」

星「なんと、それは聞が悪いな。」

星は残念そうにして言つた

樂進「……もし良かつたら許緒様が戻るまで私の鍛練に付き合わないか？」

星「ふむ…」

樂進「い、嫌だつたら良いんだぞ?…でも出来たら付き合つて欲しい…かなつと…」

樂進は恥ずかしいのか顔を赤くしてする

「」星は考え始めた

目的である許緒が街にいるなら自分はどうする事も出来ない  
かと言つて自分の主を置いて街に行くのは論外である  
なら少しどちらの娘と戯れても慶次は何も言わないだらう

その様に考えて樂進に答える

星「少しどちらに付きましたが構わないぞ。」

樂進「本當か!…なら早速、手合わせをお願いする」

樂進は嬉しそうに言った

星「……ただし……」

星は龍牙を構える

楽進「……ただし？」

星「全力で参られよ。そもそもば、我が槍を田で追つ」とも出来ぬ  
べ。」

星は不敵に笑いながら楽進に言った

楽進「つー、良いだ奴つー、お前のその慢心を口も潰してやる……。」

樂進は星に格下に見られたことに腹が立つたりしへ物凄い鬪氣を見  
せる

星「さあ、掛かつて来いーー！」

樂進「てえええいっ！」

樂進の凄まじい蹴りが星を襲う

「ガキイインーー！」

星「ふつ、良い蹴りだな。」

星は樂進の凄まじい蹴りを物ともせず簡単に防ぎ、樂進を挑発する

樂進「まだまだ！」

「ガキイー！ ガツー！ キイーンー！」

続けて楽進は素早く攻撃を繰り出すが星にそれらを返らしたり槍で防いだりした

星「中々良い攻めだ。次はこちからも攻めさせてもらひやがれ。ハ  
アアアアツ！－！」

樂進（は、速い）

「ガキイイイン！－！」

樂進「…クツ！－！」

樂進は星の龍牙を何とか手甲で受け止める

星「ほう、良く防いだな。ならコレはどうだ？」

星は楽進が少しできると認識し、素早い連撃を繰り出す

「ガキイ、グワキイインー！」

星の槍は先程よりも速く、重たかつたが楽進は必死になつて槍を防いだ

星「今のも防ぐか…。誇つて良いぞ。今の連撃を防いだのはお主で二人目だ。」

相変わらず星の表情には余裕がある

楽進「はあ、はあ。」

一方楽進は肩で息をしていた

この時、樂進は相手を見くびっていたのは自分だったと後悔していた

一日見た時ただ者ではないと思つた  
だが相手は一般兵の鎧をしていたから、強くても自分と同等かそれ  
以下だと思つた

実際は違つた

相手は將軍である夏侯惇程の強さを持っている

自分はまだまだと言いながら、先の黃巾党との戦で少し武功を上げ  
たから調子に乗っていたかもしぬなかつた  
だから今の様に相手を見くびつてしまつたのだ

星「どうした？もつお終いか？」

星は攻める様子は無く樂進が息を整えるのを待つていた

樂進はそれを見て軽く笑つた

自分は己の強さを過信しすぎた

だが彼女のお陰で目を覚ますことが出来たんだ

これからは一度とこんな事が無いようにすればいい。

樂進は今星と鬪っている事に感謝しながらそう思つた

樂進「……」

星「来いっ！」

その後は一方的な攻防戦となつた  
星の槍捌きに樂進はただ守勢になるしかすべは無かつた  
それでも樂進は諦めずに闘い続ける

しかし、しづらぐすると樂進は疲れが見え始めた

星「ハアアアアツ！」

「グワキイイン！……！」

樂進「しまつた！」

樂進は防御を崩され隙を作つてしまつ

星「私の勝ちだな。」

星は樂進の喉元に龍牙を突きつける

樂進「…私の負けだ」

樂進は両手を上げる

星「…ふむ、中々楽しかったぞ」

星は笑顔で樂進に言ひた

星としては予想以上の暇つぶしになっていたのだろう

樂進「… 礼を言つます。貴女のお陰で良い鍛練になつた。」

樂進は星に頭を下げる

星「礼はいらぬよ。これからも鍛練を怠らぬようにな。」

樂進「はい！……………スイマセン一ツ質問して良いですか？」

星「… 何だ？」

樂進「何故貴女程の実力を持つている方が兵卒なんですか？」

星「……………。」

星は予想外の質問に黙ってしまう

樂進「貴女の実力は夏侯惇将軍や夏侯淵将軍程、実力があると思します。なのに兵卒だなんて勿体ないです。今から曹操様に貴女の事を伝えに行きましょう。」

樂進は星の腕を引つ張つてどこかに連れて行こうとする

星「お、おー、ちよつと待つてくれ!」

星は慌てて樂進の手を振り解いた

樂進「どうしたのです?」

樂進は少し驚きながら星に尋ねる

星「あのな……」

星は何を言おうか迷いながら、少し遊ぶつもりだったが面倒な事になつたなと思った

星「…………私はまだ曹操殿に仕えよつとは思つていないのでよ。」

樂進「……え？　じ、じゃあ何故貴女は此処にいるのですか？」

星「それは曹操殿の器の大きさを近くで見極めよつと思つてな。だから私は兵卒として此処にいるのだ」

星は我ながら良い言い訳が浮かんだと思つた

樂進「そつだつたのですか…。勝手な真似をお許し下さい」

星「別に構わんぞ。ただこの事は内密にな。」

樂進「はい。私としては曹操様に仕えて欲しいのですが、貴女の決める事に私が口を出すべきではないですね。」

樂進は笑いながら言つ

樂進「やひと言えれば、許緒様に用があるみたいでしたが…」

星「それは私用でな。ある者に言伝を頼まれていたのだ。」

樂進「恐らく、すでに街から帰つて来て居ると思います。今頃は夏侯惇将軍達とお茶でもして居るのでしょう」

星「それは本当か？それでは私はそろそろ行くとするか。またな樂進殿。」

そう言って星はその場を去り立つする

樂進「あ、多分場所が分からないと思われるんで案内しましょうか？」

星「それは有り難い。案内してもいいとしよう。」

星と樂進の二人はその場を後にして許緒の下へ向かった

しばらく星達は歩いていると人混みを発見した

星「あれは、何なんだ？」

楽進「私にも分かりません…。ちょっと見てきまよ」

星「…私も行こう。少し気になる。」

楽進「では…」

二人は人混みの方へ行つた

? A「あつ、 凪」

? B「凪ちゃん！」

星達が人混みに近づくと一人の女の子が樂進に話しかけてきた

樂進「真桜、沙和。これは一体？」

?B「凪ちゃん、それがね～。」

眼鏡をかけた女の子は言い辛そうにする

樂進「どうした？」

?A「それがな、夏侯惇将軍達の部屋に何者かが侵入したらしいん  
や。」

独特な喋り方をする女の子が言った

樂進「何だつて!？」

? A 「でもな、夏侯惇將軍達の部屋は荒らされた訳でもなく、何か  
盗られた訳でもないんや。」

樂進「? ジャあ將軍は何で侵入されたって分かるんだ。」

? B 「それがね~.....」

星は三人の話を聞いて、もしやと思った  
するといきなり誰かが後ろから星の肩を叩いた

星「つー?」

星は驚いて振り返るとそこには慶次がいた

星（慶次殿！……もしゃこれは……）

星は小声で慶次に話しかける

慶次はしばらく黙った後とても良い笑顔で

慶次（……………悪い星、やつちまつた！）

親指を立てながらそつ言つた

慶次が部屋を出たとき慶次は内側から鍵を開けて出て行つた

その後、忘れ物を取りに戻つた夏侯淵が部屋に入る時ある事に気が付いたのである

部屋には鍵が掛かっていなかつたといふこと……

夏侯淵は自分が部屋を出るときに鍵を閉めたのだが何故鍵が開いていると言つことは何者かが侵入したという事が考えられなかつたのである  
そして今のような事になつた

この原因は慶次がこの世界の扉に慣れてなく、鍵の事は全く気にしないなかつた事だつた

星「…………どうなれるので？」

慶次「どうしようかねえ？」

慶次は苦笑しながら答えた

夏侯姉妹をみると姉の夏侯惇は周りの者に、お前か？、お前なのか？と怒鳴っている

一方妹の夏侯淵は静かに何か考えているようであつた

慶次は初めての己の失態にただ笑うしかなかつた

## 第十話 陳留侵入 後編（前書き）

携帯の単語登録つて機能を最近知りました  
これのお陰で今まで使えなかつた漢字が使えるようになりました（  
^-^）^-^

## 第十話 陳留侵入 後編

曹操は黄巾党以来、前田慶次という男の事をずっと考えていた

黄巾党の戦では、敵の将を討ち取り、さらに敵本隊を壊滅させる活躍ぶりだった

あれ程の者は公孫賛の下ではなく、自分の下に置きたいと思つてしまつた

だから戦が終わると直ぐに夏侯惇、夏侯淵の二人を向かわせたのだ

しかし、すでに彼は公孫賛の下を去つていた

その時、夏侯淵が公孫賛から、彼は天の使いだという事を聞いたらしい

天の使い　　この乱世に平和を誘う天の使者

自称大陸一の占い師、管輅の言葉である  
確かに彼からは英雄たる雰囲気を感じた

天の使いと言われても納得出来る

だがそんな事はどうでも良かつた

あの男を将として欲しい

彼が公孫賛の下を去つたのは、彼女があの男を扱える器では無かつたのだ

自分ならあの男を使いこなす事が出来る、と曹操は思つた

? 「あの男が城下に訪れてこようです。」

猫のよつた頭巾をかぶつた少女が報告に来た

少女は、荀イク、字は文若

曹操の軍師である

荀イクの話によると、城下で黄巾党の残党が暴れていたらしくすると警備兵が来る前にあの男が一人で賊を叩きのめしたようだ

曹操「なら、あの男は此処に連れてきてこよう?」

以前、曹操は配下の者達に、あの男を見かけたら城まで連れてくる

みづに指示していた

荀イク「いえ、警備隊の隊長があの男と共に城に向かっていたのですが、隊長と共に姿を消したようです。」

曹操「姿を消したって……何処に？」

荀イク「今、兵達に所在を調べさせています。」

曹操「そり……」

曹操は遺憾に思いながら、なぜ、あの男は陳留に訪れたのだろうかと考えていた  
まさか自分に仕えにでも来たのか？

あるいは、偶然陳留に訪れてしまったのだろうか？

曹操は後者の方が可能性が高いと思つた

前者だと、何故身を隠したのか、という疑問が生じてしまう  
後者なら、無理やり連れて行こうとしたら、あの男は間違いなく抵

抗するだろ？

曹操がその様に考えていると、兵士が慌てながら報告に来た

兵士「報告です…夏侯惇将軍が御乱心です…」

荀イク「は？　あの馬鹿何をしたの…？」

予想外の報告に曹操と荀イクは睡然とした

兵士「はっ！それが夏侯惇将軍の部屋に何者が侵入したらしいのです。将軍はその事にお怒りになり、誰構わずに斬りかかるうとするしまつです…どうか将軍を止めて下さい」

兵士は泣き声になりながら言った。

曹操「はあ、あの子ときたひ…。」

曹操は呆れてしまった

荀イク「華琳様、あんな馬鹿は、ほつときましょ！」

兵士「そ、そんな！」

荀イクがそう言つた瞬間、兵士の顔は青ざめていった

曹操「そんな訳にはいかないでしよう。下手したら城の何処かが壊れてしまつわ。貴方、案内しなさい。」

兵士「は、はいっ！」

兵士は安堵し、曹操達を夏侯惇の所へ連れて行つた

「キインッ！！」

慶次「はあ」

夏侯惇「黙れ！ハアツ！」

慶次「おいおい、好い加減、刃を収めたらどうだい、將軍殿？」

「ガキイインッ！！」

夏侯惇「ハアアアツ！」

樂進「將軍！夏侯惇將軍を止めなければ！」

樂進が慌てながら言つ

夏侯淵「…待て。少し様子を見る」

樂進「しかし！」

夏侯淵「命令だ、凪」

樂進「…承知しました」

夏侯淵は樂進を抑えると慶次達を再び見た

夏侯惇が凄まじい攻撃を繰り出し、慶次がそれを防いだり、時には慶次の攻撃を夏侯惇が上手く避けたりしていた

少し前に遡ると、夏侯惇が誰構わずに襲っている所を、慶次が立ちはだかつたのだ

慶次「將軍殿、少し落ち着いたらどうだい？」

夏侯惇「お前か？お前が犯人だな？　お前が犯人だあ！」

夏侯淵「！？止める、姉者！」

夏侯淵は、夏侯惇が本氣で斬りかかると思い、止めようとした

「ガキンッ！」

慶次「まったく、聞く耳持たないみたいだねえ」

だが慶次は物ともせずにそれを防いだ  
その時、夏侯淵は愕然とした

まさか兵卒が自分の姉の攻撃を防げるとは思わなかつたのだ  
しかし、攻撃を防がれた夏侯惇は闘争心をさらに燃やしてしまつ

夏侯惇「一度防いだ程度で囮に乗るなよ！ハアッ！」

それから現在に至るまで、一人は何合も打ち合つてゐるのであつた

慶次「ハツハーツ！」

慶次は凄まじい勢いで夏侯惇に槍を振り下ろす

その瞬間、夏侯惇は直感的にコレを受けたら不味いと感じ素早く躰  
した

槍が振り下ろされると、轟音がその場に響き同時に土煙が上がつた

土煙が晴れていくと、周りの者は顔を青ざめてしまった

先程まで夏侯惇が立っていた場所が悲惨な状態になつていていたのだ

いくら将軍の彼女でも、アレを喰らえば一溜まりもない

だがそれでも、夏侯惇は、違つた

彼女だけが、笑っていた

夏侯惇は臆する事無く慶次に立ち向かう

すると再び、凄まじい打ち合いが始まる

夏侯惇は心の底から喜んでいた

彼女とここまで鬪える者が、妹の夏侯淵しかいなかつたのだ

だが目の前の男は、自分の全力と互角に、いや、互角以上に闘えて  
いるのだ

その上、この男と打ち合つ度に自分の剣が鋭くなつていくを感じる

夏侯惇は、何故今までこの男の存在に気付かなかつたのか、と後悔しながら、どうすれば、この打ち合いが終わらないかと考えてしま

う

夏侯惇（こ）の後すぐに、華琳様にこの男を我が隊に編入するよう頼んでみよ。そうすれば、毎日この男と打ち合える！）

当初の怒りは何処かに消え、今の打ち合いを純粋に楽しんでいた

慶次「うおおおおつーーー！」

夏侯惇「でえええいつーーー！」

一人は同時に打ち合おうとする

〔ショーンッ〕

慶次・夏侯惇「！？」

しかし、一本の矢が一人の間に放たれ、二人は動きを止めてしまった

夏侯惇「秋蘭！…何故止める…！」

夏侯惇は夏侯淵に怒鳴った

夏侯淵「それは、この方の命令だ。」

怒っている姉と反対に夏侯淵は冷静に答えた

彼女の隣には騒ぎに駆けつけた曹操が立っていた

夏侯惇「華琳様！」

夏侯惇は曹操に気付くと直ぐに膝を屈めた

曹操「…春蘭、コレは何事なの？」

曹操は眉間にしわを寄せながら言った

夏侯惇「え…」「コレとは一体？」

夏侯惇は何故、曹操が怒っているのか分からず狼狽える

曹操「はあ、貴女の周りを見なさい」

夏侯惇の様子を見て曹操は呆れてしまう

夏侯惇は言われた通りに周りを見ると、隣にいる男と派手に暴れた  
せいで彼方此方が悲惨な状態になっていた

夏侯惇は自分が仕出かした事に気付き謝り始めた

夏侯惇「申し訳ありません…！」

曹操「それに貴女は確信も無く部下達を疑つたわね?」

夏侯惇「それは、えと……」

曹操「言い訳無用!!」

夏侯惇「すいません、すいません……」

先程の猛勇つぶりが嘘だつたかの様に、夏侯惇は主人に叱られた犬のようにじっぽを垂れる

その姿を見て、慶次は思わず笑ってしまう

夏侯惇「何を笑っている!/?元はと言えば貴様が…」

慶次「おおつと、それは筋違ひじやないかい、將軍殿？斬りかかつたのは、そちらの方だし、俺は何度も止めよつとしたんだぜ？なのに將軍殿は話を聞か無い。誰がどう見ても、悪いのはそちらだと思うんだが？」

慶次はニヤリとして言つた

夏侯惇「うう」

曹操「それぐらいにしなさい、前田慶次。いえ、天の御使いと云つた方が良いかしら？」

慶次「…やっぱ、バレちまつたな」

慶次は観念したかの様に手をヒラヒラと振つた

曹操の傍にいる兵は武器の構えをとつており、夏侯淵も慶次に餓狼爪を向けていたのだ

夏侯惇「…華琳様、一体何の事を申されてるので？」

一同「…………」

夏侯淵「な、何だ？」

状況について来れない夏侯惇に慶次達は呆れた

慶次「俺は曹操の兵では無いって事を、將軍殿。」

そう言って慶次は兜を外した

夏侯惇「貴様は、あの時の…」

慶次「覚えていてくれたのかい？ そいつは嬉しいねえ。」

慶次は再びニヤリとした

夏侯惇「あの時、よくも華琳様に無礼な態度をとったな！」

夏侯惇は七星餓狼を慶次に向ける

曹操「待ちなさい、春蘭。 前田慶次、何故こんな真似をしたの？」

慶次「なあに、ただの悪戯だ。」

曹操「…ふざけているの？」

曹操は眉間にしわを寄せた

慶次「俺は至つて真面目だぜ」

曹操「貴方、この状況が分かつていのいの？」

曹操に言われて周りを見ると曹操の兵が慶次達の周りを囲んでいた

慶次「ほう、お前さんの部下は優秀だな。」

曹操「当たり前でしょ。私の部下なんだから」

慶次「だがねえ、この程度じゃ俺を倒す事は出来ねえぜ。それに俺の部下も優秀なんでね。」

慶次がそう言った瞬間、夏侯淵は前田慶次の従者の事を思い出した

夏侯淵が曹操の方を見ると、一人の兵が曹操の背中に槍先を当てていた

周りの者は何をしているのかと動搖している

夏侯淵が急いで餓狼爪を兵士に向けようとするが曹操に止められた

曹操「…貴方の目的は私の命かしり?」

背中から狙われているにも関わらず曹操は堂々としている

慶次「はっはっは!! 僕がお前さんの命を狙つて何の得になるんだい? 狙うとしても、真正面から堂々と戦いにいくぜ」

曹操「なら何故?」

慶次「だから、ただの悪戯つて言つてるじゃないか」

曹操「天の御使いであるつ者がこんな馬鹿げた悪戯する?」

慶次「事実してこるだろ?」

慶次「ふつ、確かにね。皆、構えを解きなさい」

夏侯淵「華琳様…」

曹操「ただの悪戯に対してもが本気になつたら恥も良い」といふ

夏侯淵「……ならば、その者もです」

夏侯淵は曹操の後ろに立てる兵士を見て言つた

慶次「星、槍を收めな」

星「まつー。」

慶次に言われると星は槍先を曹操の背中から逸らした

曹操「貴女が趙雲ね？良い度胸してるわ」

星「お褒めに頂き光榮ですな。だが私もこの様なやり方は好きではない」

そりづつて星も兜を外した

曹操「へえ、可愛い顔してるじゃない。私に仕えてみる？可愛いがつてあげるわよ。」

星「御冗談を」

星は笑つて答えた

曹操「あら残念ね。…それで？貴方達はこんな馬鹿げた事をするためだけにわざわざ変装して来たの？」

慶次「まさか。俺達はお前さんと許緒に用があるんだ」

曹操「私と許緒に？」

慶次「そうだ。許緒の嬢ちゃんは誰だい？」

慶次がそう言つと、一人の少女が曹操達の視線を浴びた

慶次は少女に近づき、少女と同じ位の高さに腰を下ろした

慶次「お前さんが許緒かい？」

許緒「… さうだけど」

慶次「そう警戒しなさんなつて。俺は、お前さんに言いたいことがあるんだ」

許緒「ボクに言伝? 誰から?」

慶次「お前さんの親友、典韋からだ。」

許緒「典韋……………流流から!…? 流流は何処にいるの!…? 何で  
言われたの!…?」

許緒は親友の名が出てきた事に驚愕し、一気に尋ねてきた

慶次「典韋は曹操がお気に入りの料理屋で働いているぜ。後で曹操に尋ねて迎えに行つてやると良いぞ。」

典韋「料理屋？ボク、城に来るよつて書いたのに」

慶次「…後、典韋からの[言伝]なんだが、手紙の内容はしつかり書きなさいつてさ。どうやらお前さんの[冗談かと思つたらじへ、働きながらお前さんを捜していたらしいぜ」

許緒「もう流れつたらー! 華琳様、場所を教えて下さー」

曹操「私のお気に入りは何軒があるわ。何処の店？」

慶次「お前さんが仕えさせようとした娘ちゃんがいただろ? あの娘だ」

曹操「あの子が季衣の親友だったの…。季衣、教えて上げるから

今から迎えに行つてきて上げなさい」

許緒「有り難う御座います！ あつ！ でも…」

許緒は慶次を見る

曹操「その男は私の命は狙つてないらしいし、春蘭と秋蘭がいるから大丈夫よ。」

そつとつて曹操は許緒に場所を教える

許緒「：それじゃ、行つて来ます。 それと、流流の事を教えてくれてありがとう、兄ちゃん。 でも華琳様に悪い事しちゃ駄目だからね！」

そつとつ言い残して、許緒は走つていった

曹操「…とりあえず礼を言つわ、前田慶次」

曹操は微笑んで言った

慶次「言わなくて良いさ。許緒達の事は俺の勝手だ」

曹操「それでもよ。後、貴方は私にも用があるらしきけど、それは何?」

慶次「なに、お前さんと話をしたくてね。」

曹操「話?」

慶次「そうだ。」

慶次がそつ言いつと曹操は少し考える様子を見せる

曹操「…良いわよ。それじゃあ、今から貴方を密としてしておなすわ。

」

夏侯惇「華琳様！？」

曹操「あら、どうしたの？」

夏侯淵「この男の言つ事を信用なさるので？」

曹操「半信半疑つてところね。でも嘘だとしても、この男が私の命を狙つてなければ問題ないでしょ？それに…」

曹操は軽く笑つ

夏侯淵「それに？」

曹操「…何でもないわ。前田慶次、今から準備をさせるから少し待つてくれるかしら？」

慶次「押し掛けて来たのはこっちの方だ。いくらでも待つてやるさ」

そうして、曹操に対する慶次の悪戯の幕が下りた

慶次達が待つてゐる間に許緒と典韋が戻り、典韋は武将兼料理人として曹操に仕えるようになった

そして典韋は仕えると直ぐに料理人として慶次達に料理を振る舞つてくれた

慶次達は料理と曹操特製の美酒と共に宴を楽しんだ

その時、慶次は自分の国の話を色々とした

料理の話の時は、典韋が色々と質問してき、戦国最強と呼ばれた本多忠勝、軍神 上杉謙信、義人 直江兼続、そして、真田幸村などの武士の話をすると、話を聞いていた者は皆感動していた  
あれ程慶次を警戒していた夏侯惇でさえ、感動しすぎて涙を流した

慶次「…おつと、話に来たつてのに俺ばかり話してゐるな。」

慶次は申し訳無さないようにする

曹操「いいえ、貴方の話はとても素晴らしいかったわ…」

曹操は微笑みながら言った

慶次「そうかい？霸王にそう言われるとは光栄だねえ」

慶次は笑った

この時曹操は自分の目の前にいる男も今話された英傑達の様に偉業を為したのかと思つてしまい慶次に尋ねた

曹操「私は、貴方の話も聞いてみたいわ」

慶次「今話した御仁達の話に比べると俺の話なんかつまらなーい。  
…ただ自由奔放に生きてきただけだよ」

そつ言つて慶次は杯を傾ける

その瞬間曹操は心を打たれた

何事にも捕われず、生きるべくして生きる

口で言つのは容易いかもしないが、そんな融通無碍な生き方は決して生きやすくはない。

慶次がいる天の国でもこんな生き方は難しいだらう

だがこの男はそれを貫き通したのだ

曹操はますます慶次を自分の麾下に欲しいと思つと同時に、どうすればそれが出来るのかと思つた

慶次「曹操、俺からも一つ尋ねても良いかい？」

曹操が悩んでいると慶次が尋ねてきた

曹操「…何？」

慶次「霸王とは如何なる存在なんだ？」

曹操「天の御使いの癖に、そんな事も知らないの？霸王とは徳によらず武力・策略で諸侯を従えて天下を治める者をさすのよ。初めて名乗ったのは楚の項羽だと言われているわ」

曹操は呆れた様にする

慶次「…俺の国でもそんな御仁がいたぜ。だが、あの御仁は魔王と呼ばれていたがね。」

曹操「魔王？」

慶次「名は織田信長。天下布武を掲げ、世に霸を唱えんとした戦国の魔王だ。他者を凌駕する圧倒的な才と苛烈な魅力を持ち、天下統一まで後一步という所まで登りつめた御仁さ」

慶次は口では誉めているが、いやな顔をしていた

魔王とは余程馬が合わなかつたのだろうと曹操は思つた

そして気になる事があつた

曹操「後一步？…魔王は天下統一を為す事が出来なかつたの？」

慶次「ああ、信頼していた家臣の謀反によつて討たれた」

その瞬間、曹操だけでなく、その場にいた全員が驚いた顔をした

星「何故その者は謀反を起したのです？」

今まで静かに話を聞いていた星が口を開いた

慶次「謀反を起こした御仁の名は明智光秀。光秀は信長なら天下統一を為す事が出来、乱世から民を救えると信じていた。…だが信長の戦は残酷過ぎた。敵は悉く殺した。例え降伏しても殺す。一族根絶やしにする。それは民も同じだ。民も逆らえば、万を超える死体が出来た。恐らく光秀は『がしてきた事が間違つてゐると思つちまたたんだろう』な。」

慶次が言い終えると、その場は静かになっていた

周りの者は驚いた目で慶次を見ていた

慶次は苦笑し、酒を飲んだ

慶次「曹操。俺は初めて会った時、お前さんが信長に似ていると思つたんだ。」「

曹操「私が信長に？…ふざけないで！民とは国の宝よ。そして国はその盾となり、矛となるべきもの。そんな事も分からぬ輩と同じにしないでちょうどい！」

曹操は慶次を睨んだ

慶次「ふつ…俺の勘違いだつたかもしれないな。才あるところや霸道を為そうとしているところは同じだが信長とお前さんの霸道ではきっと、見える景色が違つんだろうな」

そう言って慶次は微笑んだ

曹操「当たり前よ。魔王だが何だか知らないけど、守るべき者を傷付ける時点で我が霸道とは異なるわ。」

慶次「そうかい、勘違いして悪かつたな霸王殿。」

慶次は頭を下げた

曹操「別にいいわ。それより、もし私が信長と同じだったら貴方は私をどうしていたの?やはり殺す?」

慶次「どうもしないさ。確かにあの御仁はいけ好かなかつたが、殺したいとは思わなかつた。それに誰が天下を取ろうが興味ねえしな」

曹操「やつぱり貴方、変わつてゐるわね。」

慶次「よく言われるよ。」

曹操「…でも私は貴方みたいな人、嫌いじゃないわ。」

慶次と曹操は互いに笑う

曹操「慶次、一応聞くけど、趙雲と共に私に仕えてみない？」

慶次「気持ち嬉しいが、俺はやりたい事もあるし、惚れた御仁にしか仕える気がないんだ」

曹操「やつぱりね。」

曹操は慶次が断るのが眼に見えていたのでさほど驚かなかつた

曹操「でも私は諦めないわ。何時か必ず貴方達を私のものにしてみせる」

曹操は宣戦布告の様な言い方で言った

慶次「はつはつは！ 面白な御仁だねえ。お前さんはこれからも長い付き合いになりそうだ。」

慶次は豪快に笑った

曹操「私もそう思つわ。…そりゃあれば一つ氣になるんだけど、貴方のやりたい事つて？」

慶次「会つてみたい御仁がいるんだ。本来なら真っ直ぐその御仁がいる所に向かっているんだが、お前さんと話をしたくなつたから此処に来たつて訳だ。」

曹操「へえ、貴方の会いたい人ねえ。まさかその者に仕えるつもり？」

曹操は江東の虎 孫堅、その娘の麒麟児 孫策、西涼太守 馬騰など慶次が興味を持ちそうな人物を思い浮かべていた

慶次「いや、その御仁とは今の様に酒を飲み交わしたり、出来れば馬上で勝負をしてみたい」

慶次がそう言うと曹操は馬騰かと思った  
馬騰は勇敢で、五胡の間に武名を轟かす豪傑であり、さらに馬術も優れているのである

曹操「もしかして、貴方の会いたい人って馬騰？」

慶次「馬騰？…それは誰だい？」

曹操「あら違うの？馬騰は西涼太守で豪傑で知られている者よ。」

慶次「へえ、馬騰…ねえ。良いことを聞いた」

曹操「じゃあ、誰なの？」

曹操が尋ねる

慶次「飛將軍 呂布。一日千里を駆ける名馬 赤兎馬に乗り、人中の呂布 馬中の赤兎とまで呼ばれた、三国志最強の豪傑だ」

この時、慶次の顔は強者を求める戦人の顔になっていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6589m/>

---

恋姫無双 外伝 傾奇者

2011年11月17日19時59分発行